

岡本恵徳試論：戦争・記憶・沈黙をめぐって

著者	我部 聖
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	34
ページ	217-288
発行年	2008-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/6405

岡本恵徳試論

— 戦争・記憶・沈黙をめぐる —

我部 聖

はじめに

岡本恵徳は、近現代沖縄文学研究の基礎を築いた研究者であるとともに、戦後沖縄に起きた問題に
応答すべく、運動の現場の声を発信し続けた思想家でもあった。本稿では岡本の言葉と思想を通じて
戦後沖縄を切り開く思考の地平を考察していくが、まずは、岡本の足跡を見渡しておきたい。^①

一九三四年沖縄県宮古島郡平良町に生まれた岡本は、五二年に宮古男子高校を卒業後、琉球大学語
学部国語専攻に入学し、在学中に文芸雑誌『琉大文学』に池澤聡のペンネームで小説などを発表した。
文芸部の部長をつとめ、第七号（五四年七月）から第九号（五五年七月）まで編集責任を担当した。

五六年に琉球大学文学部国文学科専攻を卒業し、首里高校で教員をつとめるかたわら、五六年創刊の『沖縄文学』の編集にも携わる。その後、五八年四月に東京教育大学国文学科三年次に編入学するために上京し、六三年三月に東京教育大学大学院修士課程を修了し、東京都立城南高校の国語教諭となる。またこの時期には、雑誌『クロノス』同人として梶井基次郎論を次々と発表した。

六六年四月に琉球大学教養学部講師に着任するために沖縄に帰り、七二年のアメリカから日本への「施政権返還」が差し迫るなかで、新川明や川満信一同ともに「反復帰論」を展開し、『叢書わが沖縄第六巻 沖縄の思想』（七〇年）に「水平軸の発想—沖縄の『共同体意識』について」を発表した。七〇年代に入り、七一年の一・一〇デモで警官殺害の冤罪で逮捕・起訴された松永優の裁判に、「松永闘争を支援する会」の代表としてかかわり、またCTS（石油備蓄基地）建設に反対する「CTS阻止闘争を拡げる会」（後に「琉球弧の住民運動を拡げる会」に改称）にも携わっていった。こうした運動に参加しながら、七五年の海洋博覧会や天皇制について発言する一方で、「近代沖縄文学史論」や「沖縄における戦後の文学活動」などで近現代沖縄文学研究を体系化していくのである。そして、その成果は、『現代沖縄の文学と思想』『沖縄文学の地平』（八一年）に結実する。また八〇年代半ばから、島尾敏雄が提唱した「ヤポネシア論」に関する文章を書くようになり、九〇年に『ヤポネシア論』の輪郭—島尾敏雄のまなざし』としてまとめられた。その後、『現代文学にみる沖縄の自画像』（九六年）、『沖縄文学の情景』（二〇〇〇年）を刊行した。さらに『沖縄文学全集』（九〇

年）『ふるさと文学館 第五四巻 沖繩』（九四年）、『沖繩文学選—日本文学のエッジからの問い』（〇三年）などの文学アンソロジーの編者や、琉球新報児童文学賞、新沖繩文学賞、九州芸術祭文学賞といった沖繩県内の文学賞の選考委員をつとめた。

九三年に、新崎盛暉らとともに『けーし風』（新沖繩フォーラム刊行会議）を創刊し、第五号（九四年一二月）から第四九号（〇五年一二月）まで四四回にわたって「偶感」という論考を連載する。二〇〇六年八月五日に肺癌で息をひきとるまで岡本は、文章を書き続けていた。そして、こうした岡本の思考の軌跡を集成した『「沖繩」に生きる思想—岡本恵徳批評集』が二〇〇七年八月に刊行された。

このように戦後沖繩を歩んできた岡本が、特に近年、「記憶」にこだわっていたのが気になっていた。晩年におとずれる何か、たとえば「晩年のスタイル」（サイド）²というふう²に解釈しようとしてもそのように解釈できないものがあるような気がする。また二〇〇三年と翌年に小説「洋平物語」を書いたことも引かかっていた。琉球大学在学中に『琉大文学』に小説を発表し、その後も小説を書くことと試みていて、それが結実したのが「洋平物語」だというふう²に考えることもできるが、それならばどうして「沖繩」を描かなかったのだろうか。沖繩にかかわり続け、沖繩文学の研究者であったにもかかわらず、「洋平物語」では「沖繩」を描かなかった。また「記憶」について思考をめぐらすことは、必ずしも良い思い出ばかりが訪れるわけではなく、そのことは「戦争の記憶」についても

同様であるはずである。

たとえば、結核を患って復員した兄に関する記憶は、「偶感（四二）」（二〇〇五年）に書いてあるように、「身に沁みる痛みを伴ったもの」であったに違いない。言葉を書き記し、それを読みなおしながら、ことばにできない思いがあふれだして、よみがえった記憶の波に飲みこまれてしまうことがあったのではないだろうか。たとえそれが小説の設定だとしても、「洋平物語」において、「洋平」の「私的な記憶」について書くときに、言葉やしぐさにまつわる記憶にとどまらないものが岡本の胸に押し寄せてきただろうと考えられる。それはあまりにもナイーブな見方かもしれないが、自らに深くかわる「記憶」を探り、「戦争の記憶」に関する論考を書き続け、そして亡くなったあとに発表されたのが、「記録すること 記憶すること」というのも示唆的である。そういったこともふくめて、なぜ岡本が「記憶」にこだわったのかについて考えるには、岡本の思考の軌跡を振り返りながら、「戦争」や「記憶」、さらには「沈黙」や「ことば」に関するつぶやきに耳をすます必要があるのではないだろうか。

本稿は、岡本の残した言葉との対話の試みである。

一 言葉と戦争

一九三四年九月二十四日、岡本恵徳は、沖縄県宮古島郡平良町に生まれる。家は「代々僧職について、

禪宗、臨濟宗の「祥雲寺であった。^③ 岡本の両親は、家では宮古の方言は使わずに、生まれ育った那覇の言葉を使っていたが、栃木出身の義理の姉といっしょに暮らしていたことから、家庭では「共通語」を話していた。^④ そのエピソードが興味深いのは、近代の沖縄において「共通語」は「方言札」を用いて言語を矯正した学校教育と結びつきやすいが、岡本の家では「共通語」の意味合いが異なり、そこには言語体験の「ずれ」があったからである。それとともに、次のような感覚を覚えていた。

僕自身はほんとうに自分の言葉というのを持ってないなという感じがします。友だちとは宮古の言葉をちゃんと使えない、両親とのあいだでもちゃんと使えない、共通語もちゃんと使えないということで、ほんとうに自分のことばがないという気がするわけですね。そういう状態だったからどこへ行っても余所者という感じになってしまう。^⑤

言葉とのかかわりにおいて「余所者」というふうに感じる感性は、岡本が「沖縄」を考えるうえで重要な視点を獲得するきっかけになっただろう。たとえば、それは、「近代沖縄文学史論」（一九七五年）において、「近代日本語」と「伝統的な言語（方言）」が攻めぎあう「言語の二重性」など沖縄の近代が抱える葛藤を指摘したことにもつながっている。このような感覚を抱えながら岡本は、平良第一国民学校の頃に戦争を体験した。一九四四年に岡本は、台湾への疎開船に乗る準備をしていたが、

出発当日の朝に米軍機によってその船が沈没させられて乗船できなかった⁽⁶⁾。また、一九四四年か四五
 年ごろ、兄と一緒にグラマン戦闘機に機銃掃射をうけた体験があったという⁽⁷⁾。のちに岡本は、自らが
 体験した空襲の記憶を次のように書き記す。

低い稜線にさえぎられて、はっきりとは見えぬものの、その西向うの空は真っ赤に燃えあがって
 いる。ときどき、火の粉とふきあげる灰黒の煙が渦まいている中を、大小いくつかの黒いかたまり
 が、風に流されて海の方へと行く。丘陵のふちは炎のほてりで照らしだされるかのようにくつきり
 としているが、裾のあたりは、すでに夕闇につつまれて、もののかたちは定かではない。まわりの
 大人たちの顔は、闇の中に白く浮かんでいるが、いずれも声を呑んだまま、身じろぎもせず、西の
 空を眺めるだけだ⁽⁸⁾。

「沖縄本島では凄惨な死闘が繰り広げられ、宮古島にも連日のように空襲があつて、市街地の大半
 が焼失したが、それほど切迫した状況のなかにいたという記憶はない⁽⁹⁾」と感じていた岡本だったが、
 一九九五年一月の阪神大震災の映像を見て「少年の頃の記憶がこれほどに鮮やかな肉体性をもって甦
 るとは思ひ懸けない体験であつた」と述べているように、ふとしたことで日常のなかに「戦争の記憶」
 がよみがえってくることは、見逃せない現象である。

戦場で受けた心身の傷の深さゆえに語りえない言葉の重さについて、岡本はくりかえし言及してきた。そのことを岡本の少年時代の戦争体験にのみ還元するのではなく、岡本の言葉と思想の核に「戦争」が存在していたことを意識しながら、岡本にとっての「戦争」「記憶」そして「沈黙」の持つ意味について考えていきたい。

二 空疎な回想／ガード

今はそれほどでもなくなったが、かつて、ひどく疲れた夜など、何ものかに執拗に追跡される夢におびやかされてまんじりともせずに夜明けをむかえるということが多かった。追われて駆足で逃げるというのではなく、見えがくれに執拗にどこまでもあとをつけてくる、という夢である。(中略)あとをつけてくるのはきまって私服の米兵であり、その場所は、低いトタン屋根の軒並の続く細いまがりくねった路地で、ガープ川沿いとおぼしきあたりである。⁽¹⁰⁾

一九五二年、岡本は宮古男子高校を卒業し、琉球大学語学部国語専攻に入学する。同期に入学したなかには、『琉大文学』の同人となる川満信一、豊川善一、松島康子らがいた。『琉大文学』は、一九五三年から七八年にかけて三四号まで発刊された文芸雑誌であり、新川明、川満信一、いれいたかし、儀間進、清田政信、中里友豪など戦後沖縄の文化・思想をリードする人物を数多く輩出した雑

誌でもある。⁽¹¹⁾

岡本は、池澤聡のペンネームで創刊号から第一一号までに、「『弱き者』」（創刊号、五三年七月）、「静かな嵐」（第三号、五三年十一月）、「或るセンチメンタリストの話」（第四号、五四年一月）、「弊履」（第五号、五四年二月）、「革帯（ベルト）」（第六号、五四年七月）、「空疎な回想」（第七号、五四年十一月）、「ジャパニー」（第一〇号、五五年二月）など七作の小説を発表した。⁽¹²⁾「或るセンチメンタリストの話」までは、恋愛（『弱き者』）やコンプレックス（顔に痣のある青年が登場する『静かな嵐』）などをテーマに描いていたが、『弊履』において、工場で働く労働者を登場させ、システムティックに身体が拘束される様を描き、同じく『革帯』でもしだいに感覚が麻痺していく労働者を描いたように、関係性から社会の問題へと視点が変化していったといえるだろう。またそれは、五四年頃から、『本土』から帰った人たちと接触し、「非合法組織に関わりをもつ読書会」で、「非合法に入手したマルキシズム関係の図書、合法的に書店から注文して手に入れた『新日本文学』や『近代文学』」などの雑誌を通じて、マルクス主義や社会主義リアリズムを学んだ影響として考えることもできる。⁽¹³⁾この節の冒頭に引用した夢の話は、当時、絶えず「CIC（米国民政府の民間情報局）の眼」を避けながら、読書会の場所を変えていった体験が夢にあらわれた原因ではないかと岡本自身が一九八〇年にふりかえったものである。

『疏大文学』第七号に発表した小説「空疎な回想」⁽¹⁴⁾は、第八号（五五年二月）において北谷太郎

（新川明）と栄野川泰、第九号（五五年七月）には大城立裕を加えて、戦後沖縄の小説で初めての論争を引き起こした作品である。⁽¹⁵⁾ この小説は、侵入者を射殺したことで生活の保証を得る「行雄」と中国での戦争体験からカービン銃を用いなかったために侵入者に撲殺される「研三」という二人のガードを軸に展開するが、論争では、「こゝでは、射殺するか、でなければ、自分で死ぬはめになるのは判りきった事ではないのか！」と侵入者を射殺した行為を正当化する「行雄」の倫理観に議論が集中した。⁽¹⁶⁾

しかし、ここで重要なのは、中国戦線で中国人を虐殺した記憶を抱える「研三」が、今でも銃を持つ手が血で赤く染まっている感覚を持ち続けていることから銃を用いることができなくなることである。この血ぬられた掌の感覚を「境界」にして、「研三」は幾度も中国戦線の現場に連れ戻されるが、そのことは、「研三」が、アメリカ占領下の沖縄に生きる現在においても、「戦場」を生き続けていることを示しており、言いかえると、「研三」の身体には、戦時における身体性が表出しているのである。中国戦線で中国人を虐殺したように、アメリカ占領下の沖縄で再びの虐殺に加担することを拒否しようとする「研三」の描き方は、発表当時の『琉大文学』の批評意識と響き合っていた。『琉大文学』では、第六号の新井暁（新川明）「船越義彰試論」と川瀬信（川満信一）『『塵境』論』、続く第七号の新川明「戦後沖縄文学批判ノート」などにおいて、戦争責任・戦後責任論を問うていたからである。⁽¹⁷⁾ 沖縄に生きる人どうしが争わなければならない構造をあぶりだし、戦争の記憶と身体のかかわり

を批判的に問いなおした小説作品として、「空疎な回想」／「ガード」を読むことができる。⁽¹⁸⁾

朝鮮戦争後の冷戦体制を見すえてアメリカが沖縄での軍事基地建設を積極的に押し進めようとするなかで、岡本をはじめとする『琉大文学』同人たちは、一九五五年七月の伊佐浜での強制土地接收の現場で武装兵に追われる体験をした。⁽¹⁹⁾ またアメリカ占領下の沖縄では出版する際に検閲が定められていたうえに、琉球大学内の出版物も事前に学生部に提出し、副学長の認可が必要であった。⁽²⁰⁾ その意味でも「空疎な回想」に書き込まれた、「何時でも誰かに監視されて居る様な不安」⁽²¹⁾ というのは、小説表現に収まらない射程を持っている。実際に第八号は「学生準則」に定められた「事前検閲」を経たにもかかわらず、発刊後に雑誌が回収され、第一一号は、「事前検閲」に従わなかったために停刊処分と半年間の部活動停止を言いわたされた。さらに、土地の一括払いを認めた「プライス勧告」に抗議した「島ぐるみ闘争」において、琉球大学の学生が「ヤンキー・ゴースホーム」など「反米的な言辞」を弄したとして、琉球大学の学生六名が退学、一名が停学となった「第二次琉大事件」⁽²²⁾ において、退学処分を受けた三名と停学処分を受けた一名は、『琉大文学』同人であった。五六年三月に琉球大学文学部国文学科を卒業後、首里高校の教員となった岡本もこの事件に衝撃を受け、五八年に沖縄を離れる原因の一つとなった。

三 水平軸の発想

一九五八年に東京教育大学に編入学した岡本は、吉田精一のゼミに参加して近代日本文学を研究し、修士論文では梶井基次郎を論じた。⁽²³⁾その後、東京都立城南高校の国語教員を務めていたが、仲宗根政善らの強い勧めもあって、六六年に琉球大学教養学部講師となるために沖縄に帰る。⁽²⁴⁾当初は、夏目漱石や芥川龍之介などを論じていたが、しだいに沖縄の「文学」や「思想」を考えるようになり、沖縄戦と向き合うことになる。たとえば、沖縄戦における「集団自決」を扱った大城立裕の小説「神島」⁽²⁵⁾『新潮』六八年五月号⁽²⁶⁾について岡本は、「大城立裕『神島』を読んで」⁽²⁷⁾において、「集団自決」の記録をとりよきた「田港真行」を問題視し、「田港真行が、島民の集団自決とどのようににかかわるものとして自己をとらえそしてその後の島民の生き方にどのように触れていこうとするのか、を自らのうちに問いただすこと」によって問題を明らかにできるだろうと述べていた。ここでは、「集団自決」と向き合う主体のかかわり方として、戦争体験を持たない者が戦争体験者とかかわる際にあって然るべき問い返しがないことを批判している。そして一九六〇年代後半から七〇年にかけて岡本は、沖縄戦の戦争体験に関心を向け、「水平軸の発想」にいたる思想の変遷を遂げていくようになる。

一九六九年二月に仲宗根政善の『実録あひめゆりの学徒』⁽²⁸⁾の書評を執筆した際に、「わからないもの」として沖縄戦での「ひめゆり」や「鉄血勤皇隊」の学徒たちの「殉国」の意識をとりあげた。そして学徒たちの「手記にみられる無償の献身の美しさと明るさ」が気になり、そこには「戦いとい

うことにいささかの疑いも批判も、それに参加を余儀なくされている自己への不安も、ついに見出すことができない」が、それは「戦争そのものを相対化しえなかったために、戦争責任の意識を欠落させてしまった沖繩の戦後に生きた人々の意識と、軌を一にするかも知れない」と述べていた。そして学徒たちを引率した仲宗根が執筆した「浄魂を抱いて」の「文体のリズムまで支配しているかにみえる著者の倫理的な美しさ」に岡本は「かすかないらだち」を感じるが、それは「今まさにベトナム戦への加担者として生きている私（たち）」が、それを余儀なくさせている沖繩の状況にたちむかうとき、このような美しさは、私（たち）からある種の狂暴な怒りを奪いさる」のであり、またこうした美しさを歓迎するような「殺戮者」の権力に絡めとられないためにも、「このような美しさを心から拒否したいとねがっている」と述べた。このように岡本は「ベトナム戦への加担者として生きている私（たち）」の立場から、現実を直視して「戦争責任」の問題を考えようとする。ここで岡本が「わからないもの」として、沖繩戦の「語り」から派生する「美しさ」を取り上げるのは、「殉国美談」の物語に回収されることに抗いながら戦争体験を持たない世代が、自らの視点を手放さずに、どうすれば体験者の言葉を受けとめることができるのかを自らに問いかけているからであろう。

『あひめゆりの学徒』の書評と同じく池沢聰のペンネームで書いた『『わからないこと』からの出発』（『沖繩タイムス』一九六九年八月二八・二九日）では、「わたし」ではなく「彼」という人稱を用いながら、私的な記憶を語り始める。「一九五五年七月十八日」の伊佐浜土地接收の現場、

「一九五六年八月」に『疏大文学』の友人たちが退学処分されたこと、「一九六〇年六月十五日」の「樺美智子の死」³⁰⁾、「一九六四年十月」の「中野重治の除名」など、具体的な日付を持った記憶の中で回想される出来事は、これまでの岡本の苦い体験をたどるものである。そして「一九六六年三月」に「おきなわ」へ帰り、友人たちの現在を見つめながら、「現場にいあわせながら、いつも、おのれの血を流すことをしなかった彼の、おのれを待みとする論理がかるうじていきつく場所」と見なす「おのれの（わからないこと）から歩み出さねばならない」とし、「おまえの敵はおまえだ」ということの確認を通じて「わからないこと」を明らかにしようとする。

「わからないこと」をおのれのうちから、ある場合には状況のなかからつむぎだすことが、徒勞のようにみえようと、あるいはひどく困難なことだとしても、それをする、そのことを通して現在のなかにまぎれこんでいる過去をひき剥がし現在のなかに息をひそめている未来をたぐりだしていくところを続けることが、彼のなしうる「現代」を「生きる」ことであろうと考えているのだ。³¹⁾

さらに池沢（岡本）は、「ことばにこだわりたい。そしてそのことばで、いささかでも『わからないこと』から出発し『わからないこと』の内容をおのれに對しても、あるいは多くの人に對しても問

いかけていきたい」と語っていた。こうした岡本の「わからない」という問いは、自明の前提を成り立たせる論理そのものを内側から自分自身で打ち破っていく試みと考えることができる。いいかえると、「わからない」というつぶやきは、「わかる」と言って安定した構図に組み込まれることを拒否し続ける思考の運動であり、それは岡本の思考のスタイルでもある。

岡本は、六九年七月から翌年の六月まで『沖縄タイムス』の「唐獅子」にコラムを連載するが、その多くが「沖縄戦」に関する文章であった。連載初回の「戦争体験の記録」（七月一日）では、沖縄戦の体験記録の事実は客観的な視点から問題視するのではなく、「その体験の投げかける問題が個人の枠組を越えて生きている」ことを押さえながら、「沖縄戦の体験が、ぼくたちのいま」に「突き刺さるもの」とは何であるのかを明らかにすることを訴えた。ここでは、戦争体験記録を実証的な面から誤りがあるという切り捨ててしまうのではなく、むしろ非体験者に「突き刺さるもの」を持つ体験記録の喚起力に注目していた。⁽³²⁾ また『戦争責任の追及』ということ（九月二八日）では、当時『沖縄タイムス』に連載された「現代をどう生きるか」の執筆者の多くが「戦争責任の追及」を問題にしながらも、論者自身も追及の対象となることを自覚していなかったり、あるいは論者自身は免罪されていると感じるような「鈍感さ」を見出した。つまり「戦争責任の追及」は「すぐれて思想的な課題」であるとともに「個人的な倫理の問題」をともなう複雑で困難な試みだといえる。⁽³³⁾ それだけに自らの問題としてとれだけ抱え込むことができるのかが問われているのである。

ここで同時期の沖縄戦をめぐる動きについてもふれておきたい。七〇年三月、渡嘉敷島の「集団自決」の命令を下したとされる赤松嘉次元大尉が来島し、「命令しなかった」と発言したことで、「集団自決」が議論された。それに対して岡本は、「唐獅子」の『責任の追及』ということ（四月五日）のなかで「事実の究明ということでもって、逆に赤松元大尉の責任を追及する主体側の問題が欠落してしまわないか」と問いかけた。⁽³⁵⁾ また「集団自決」を体験した金城重明は赤松の自決命令の事実確認が問われる必要さを認めたとうえで「なぜあのような状況に追い込まれたかを問わないで、一つの現象だけを追及すると、個々のできごとの関連性を分断するだけであって、真に歴史を見ることにはならない」と述べ、さらに「戦争責任が赤松氏の個人的追及と言う形でなされるならば、戦争責任の深い意味が忘れられたこと」になり、「当時の軍部の責任者」であった赤松をはじめとする「あらゆる軍人、そして日本国民一人ひとり」、つまりは「被害者であった者」をもその責任を問われるとした。⁽³⁶⁾

この「集団自決」をめぐる問題について岡本は、『沖縄に生きる』思想——『渡嘉敷島集団自決事件』の意味するもの——（七〇年）のなかで次のように述べる。

かりに命令が下されなかったとしても、命令のあった場合と同質の状況がみられたとするならば、事実として、命令が下されたかどうかは、ことの本質の上にはかわりをもたないのであり、事実のせんさくはほとんど無意味なこととなる。それよりむしろ、なぜこのような惨劇が生じたかとい

う原因、あるいはこのような惨劇のしめすものを問うことが重要なこととなるだろう。⁽³⁷⁾

この発言には、「集団自決」の起りうる情況へ問いが差し向けられているといえるだろう。

この年、谷川健一編『叢書わが沖縄 第六巻 沖縄の思想』が刊行され、「復帰」を前に、それぞれの論者が自らの抱える思想的課題に取り組んでいた。たとえば、新川明は『非国民』の思想と論理⁽³⁸⁾」において「沖縄人」の「差意識」に注目して「日本同一化をねがう『復帰』思想を打ち砕くことによって、反国家の拠点としての沖縄の存在を確保し、その沖縄の存在をして〈国家としての日本〉を撃つ」試みを展開した。また川満信一は「沖縄における天皇制思想」の中で「天皇制」とそれを受容する民衆の意識を掘り下げて検討した。⁽³⁹⁾そして岡本は、「水平軸の発想—沖縄の『共同体意識』について」を書くのである。

岡本は東京から「沖縄に帰り、自分の中の『沖縄』を明らかにしようと考えたとき、まず最初に問題となったのは『沖縄戦』での戦争体験の問題であった」と当時の心境を述べる。岡本は、いれい・たかしの文章を読みかえて渡嘉敷島での「集団自決」⁽⁴⁰⁾は「沖縄のすべての人のうえに起こりえたもの」として「対象化」する必要があるが、その際に「再び同様な条件に置かれるならば、わたし自身が起こすかも知れぬ悲惨であるという怖れ」を持つことで初めて対象化することが可能になると指摘した。ここで注目したいのは、「わたし自身が起こすかも知れぬ」⁽⁴¹⁾という視点である。それは、「集団自決」

を論じる対象として突き放すのではなく、自らにも起こりうることであり「集団自決」を生きなおそうとする試みである。

また岡本は、自分のなかの「沖縄」を確かめる過程で「戦争体験」と「戦後体験」の軸としての「復帰運動」を考えることを通して、沖縄の人々を強く規制している「共同体的生理」に出会う。そして「沖縄の思想」が成り立つとすれば、「いまだ論理化されない、情念の領域に多く潜んでいる」と思われる「共同体的生理」をとらえなおすことから始めなければならないと述べた。また「共同体」と「集団自決」の結びつきを認めただけで、「本来、共に生きる方向に働く共同体の生理が、外的な条件によって歪められたとき、それが逆に、現実における死を共にえらぶことによって、幻想的に“共生”を得ようとした」のが「集団自決」であったと述べていた。

そして「沖縄における共同体的生理の機能と構造」に目を凝らして、「復帰運動」は、「沖縄の人たちにとっては、一種の疎外された状況からの自己回復の運動であった」ととらえたうえで、「渡嘉敷島の集団自決事件」と「復帰運動」は、「ひとつのもののふたつのあらわれ」であると指摘した。言いかえると「集団自決」と「復帰運動」の根は同じだということである。^⑩

この「水平軸の発想」を「集団自決」や「反復帰論」の文脈で読むことも重要だが、ここでは、山之口貌の詩「会話」を分析するなかで見出された、「おきなわ」を語る困難さに注目したい。岡本は、「沖縄」について問われ、答えようとして感じた「語りつくせない奇妙ないらだち」を次のように述

べた。

まともに答えようと努力すればするほど沖繩の実体は失われ、むなしさだけが残る。そして語られた言葉はねじまがってかたちばかりの、かたちばかりだから歪められてしまうところの、そういうものとして沖繩はあった。⁽⁴³⁾

言葉にすることは、言葉になりえないものを抱えることの始まりであり、その言葉になりえないものが切実であればあるほど、言葉は蹟きながらも宛先を求めていくのではないだろうか。ここで岡本は、言葉になりえないものを書くことによって「沖繩」を語る困難さを表現しているといえるだろう。つまり、岡本は、沖繩をめぐる議論からこぼれ落ちていく言葉になりえないものを「沖繩の思想」としてすくい取っていたのである。

沖繩の「施政権」がアメリカから日本に「返還」されることが具体化していくなかで、「国家」としての日本にすり寄っていく「沖繩人」の精神構造を批判的に問いなおす新川明や川満信一らによって、「反復帰」論が展開された。岡本は、新川や川満とともに『中央公論』七二年六月号の沖繩特集の編集を担当し、「戦後沖繩の文学」を寄稿した。この論考において岡本は、「沖繩人である」自明性を解き放ちながら、「沖繩人になる」可能性を論じた。それは、戦後に書かれた沖繩文学を検討する

なかで見出された論点であるが、それは、「施政権返還」によって回収されない抵抗の主体の試みとして打ち出された表現というふうに見えることができる。⁽⁴⁴⁾

四 「沖縄」に生きる

一九七二年五月一五日に沖縄は日本に「復帰」した。「その日は土砂降りの雨だった」という「復帰」当日のことを多くの人が覚えているのは、当時の沖縄の人々の「心象」と重なるからだろうと、岡本は屋嘉比収との「往復書簡」⁽⁴⁵⁾のなかで述べていた。そこには、近年高良倉吉が、沖縄の大多数の人々が「復帰」に賛成したと述べる言説とは異なる風景が広がっている。⁽⁴⁶⁾また岡本は、「施政権返還」にまつわる五月一五日前後のことよりも、「復帰運動」とそれに伴って生じた出来事の方が強い印象として残っており、「復帰」は支援者の一人として関わった「松永事件」と切り離せない記憶としてあることを書きつづっていた。この「松永事件」とは、七一年一月の「施政権返還協定」に反対する「一一・一〇ゼネスト」のデモで、埼玉から染色の研究のために沖縄を訪れた松永優が、火炎瓶を投げつけられた警官を救助しようとしたにもかかわらず、冤罪で逮捕され、のちに起訴された事件のことである。松永と同じくその日のデモに参加していた岡本は、この冤罪をめぐる争われた「松永裁判」⁽⁴⁷⁾にかかわり、七三年から松永の無罪が確定する七六年まで「松永闘争を支援する市民会議」の代表となり、機関誌『沖縄・冬の砦』の発刊にたずさわった。⁽⁴⁸⁾

また、金武湾の宮城島と平安座島間の公有水面を埋め立てるCTS（石油備蓄基地）建設に反対するために七三年九月に結成された「金武湾を守る会」を支援しようとして、七四年に「CTS阻止闘争を上げるために」という声明を発表し、「CTS阻止闘争を上げる会」が発足した。岡本は、新川明や新崎盛暉らとともに、呼びかけ人に名を連ねていた。⁽⁴⁹⁾その後「反CTS講演集会」（七五年一月）、自主講座「反公害と住民運動」と懇談会「琉球弧の住民運動」の開催（七六年一月）を経て、七七年七月に機関誌『琉球弧の住民運動』が創刊され、岡本も編集者として参加した。⁽⁵⁰⁾

このように岡本は、「復帰」をまたいで起きた社会問題に対して市民・住民運動にコミットするようになるが、沖縄戦をめぐる歴史認識にも批判的に介入していくのである。

渡嘉敷島の「集団自決」の命令を下したとされる赤松嘉次元大尉は、命令を下していなかったと主張する曾野綾子の『ある神話の背景』が七三年に出版された。岡本は、「曾野綾子『ある神話の背景』をめぐる」（『沖縄タイムス』七三年六月八・一〇日）⁽⁵¹⁾のなかで、軍隊というのは上官の命令を「天皇」の命令として絶対化する構造と論理によって成り立っており、この構造と論理は、「最も責任を取るべき存在（たとえば天皇）が責任を取らなかったとき、今度は同じルートで責任は下部へと転化（下降）されていき、それ以上転化しえない現場の責任者が責任を引きうけなければならない」と指摘したあとで、次のように述べる。

赤松元大尉が責任を追及されるのは、彼がまさしくそのような軍隊の構造と論理の体现者であったことから帰結であろう。とすれば、赤松元大尉の自決命令の有無よりも、彼が軍隊の構造と論理について、どのような位相でどのように対したか、ということが重要な意味を持つてくる。彼が軍人として、その論理に従う限り、そのもたらす必然の帰結として責任を取らざるを得なくなるに違いない。赤松個人という問題ではなく、軍人赤松として、責任を免除することはできないだろう。⁽⁵²⁾

そして岡本は、軍命が下されたかどうかという事実関係よりも、「事実を『神話』として支えた沖縄の住民の戦争による傷が癒されぬ限り、依然として『神話』は生き続けるに違いない」と述べた。この指摘は、「軍命」の有無にのみ目が向けられていくことによって、「集団自決」という被害と加害の錯綜した現場の状況がわからなくなることへの危惧と、体験者の「傷」を直視しようとする意思に貫かれたものだといえるだろう。そして、ここで岡本は、「集団自決」に向けられる感情を「神話」として切り捨てようとする曾野綾子の言説に対して、「神話」を成り立たせるものの背後にある可能性を取り戻そうとしたのではないだろうか。

そのことを考えるうえで、岡本が「わが沖縄 原点とプロセス」(『琉球新報』一九七三年二月、七四年二月)⁽⁵³⁾において、沖縄戦を主題とした小説を取り上げて、沖縄に生きる人たちにとって沖縄戦

が「ぬきさしならぬ」ものを問いかけていると指摘したことに注目したい。

たとえば、吉村昭の『殉国』について、沖繩戦当時の沖繩の中学生と「本土」の中学生との間に、「愛国心」や「殉国」に対する考えに隔たりはなかったかのよう⁽⁸⁴⁾に主人公「比嘉真一」に自己を投影する作者の姿勢が、「沖繩戦」を「戦争」一般に還元することになり、「沖繩に住むばく（たち）」にとって、それが他ならぬ「オキナワ戦」であることによってもたらされる「ぬきさしならぬ意味」を追求するという姿勢を感じさせない結果となり、それがこの小説に対して「もの足りなさを感じる原因」になっていると述べた。また吉村にとって沖繩戦は「戦争」のなかの「一つの特異な状況であるのに対して、沖繩のばく（たち）」にとってそれはぬきさしならぬ、この問題を避けては他の何ものも主題となりえぬものであるという受けとりかたの相違に、多く由来するに違いない」と述べていた。

このように「沖繩戦」と向き合う岡本は、「曾野綾子『ある神話の背景』をめぐって」のなかで同じような状況に置かれたならば、同じあやまちをおかしかねなかったという思考によって、沖繩戦を了解可能なものとして受けとめようとする曾野綾子の言説の持つ問題性を問いかけていた。曾野の思考のあり方は、岡本が「水平軸の発想」で提起した「再び同様な条件に置かれるならば、わたし自身が起こすかも知れぬ⁽⁸⁵⁾」という言葉を想起させる。一見すると曾野綾子が赤松と向き合うなかで見出した論点と、岡本が「集団自決」と対峙するなかで見出した論点が重なっているように見えるが、その「責任」の引き受け方は異なっている。曾野が自決命令はなかったということで、問題を落着かせ

ようにするのに対し、岡本は、絶えず自らに問い続けながら「集団自決」にかかわっていくのである。そこには、暴力にさらされ続ける沖縄を足場にしてどのように戦争を思考するのかをめぐる両者のスタンスの違いがあらわれている。岡本が「沖縄に生きる」と表現するときには、「沖縄」という具体的な土地だけを名指すというよりも、「沖縄」が歴史的に被った傷を引き受けながら、生きなおそうとする意味合いが込められているのである。はたして、沖縄という「戦場」の地に足をつけて、「自決命令はなかった」という事実関係だけを主張することができるのか。いまでも終わらない「戦争の記憶」を抱えて生きる体験者に向かって、「集団自決」の「軍命はなかった」とのみ言うことができるのだろうか。

また同じ論考のなかで岡本は、赤松や住民を虐殺した鹿山に見られるような「あのときはやむをえなかった」という論理で、当時の状況に還元することで「責任」の所在を曖昧にすることに注意を向けたうえで、「ぼく（たち）の中にもそのように状況に還元させて責任を免れようとする意識が強く働いていることは認めなければならない」と述べていた。ここにも、絶えず自らに問いを差し向ける岡本の思想的な構えがあらわれているといえるだろう。

「復帰」後の沖縄の変動を象徴的に示したのが、七五年に開催された沖縄国際海洋博覧会（海洋博）であった。「海洋博」に関しては、その経済効果も議論されたが、岡本は、「学問的、文化的」意義という言葉に足元をすくわれて、「海洋博」を正面から論じられなかった問題を指摘する。また大城立

裕が、海洋博に反対する意見はなかった、と述べたことに對して、マスコミにあらわれなかった青年たちによる研究会を取り上げていた。⁽⁵⁶⁾

それだけでなく、海洋博の名誉総裁として皇太子が沖縄を訪れることが論議を呼び、たとえば、『新沖縄文学』二八号（七五年四月）では、「天皇制」を特集した。⁽⁵⁷⁾ また七月に皇太子が来沖した際に、ひめゆりの塔の前で火炎瓶が投げつけられる事件があった。岡本は、「私にとっての天皇制」（七五年一二月）のなかで、「天皇（制）」にこだわるモチーフについて、「戦争体験」をあげていた。⁽⁵⁸⁾ さらに『沖縄にとって天皇制とは何か』（七六年）の解説において、沖縄における天皇制論の歴史的過程を論じているが、その文末で「言葉以前の沈黙の世界で、天皇（制）」について鋭く告発し続ける人々の存在も、われわれは無視してはならない」と述べていた。⁽⁵⁹⁾

そして「復帰」以前から集団就職は議論されていたが、大城立裕は、集団就職に行った人たちが「そのかみあわなさのために挫折する、という今日の状況は痛ましい」として彼らを「救う手段として、まるごと同化の道を授けるか、生活の能力と『沖縄』の誇りにめざめさせるかであるが、どれもそれほど容易なことではない」と述べていた。⁽⁶⁰⁾ それに對して岡本は、集団就職した若者たちが行動を通じて何を表現しようとしていたのかを探り、「彼らは、そこでようやく強いれた存在であることを自覚し、自己をとりもどし始めたといえないか」と述べ、「彼ら」の行動に理不尽な状況への抵抗を読みとっていた。⁽⁶¹⁾ その文章は一八七九年の「琉球処分」から百年の特集に書かれたものであり、そ

こには、「ぬきさしならぬもの」として目の前に突きつけられている現在の「琉球処分」を照らし出しながら、その状況を切り抜ける視点を提示しているといえるだろう。

五 沈黙へのまなざし

一九八一年に岡本は、それまでに書いた論考を『現代沖縄の文学と思想』と『沖縄文字の地平』にまとめた。同じ年に書いた「十五年戦争を読む」⁽⁶²⁾のなかで、『沖縄の悲劇』と『鉄の暴風』をとりあげ、「女学生が国に殉ずる」ために「自ら死を選んだ」ことと渡嘉敷島での「集団自決」に衝撃を受けたことについて、「どうしてそういう悲劇が生じたのか」という問いを「かりに、自分がもう少し早く生まれておれば、同じように生き、死んだのかもしれない」という言葉に結びつけながら「再びあらしめてはならない悲劇を考えると、死者の側にたちうる想像力は、最も必要なことではないか」と述べていた。

八二年の文部省の教科書検定において、沖縄戦における日本軍による「住民虐殺」の記述が削除されたことが明らかに、『沖縄タイムス』や『琉球新報』では、特集が生まれ、多くの戦争体験者が証言を行なった。岡本は「教科書問題と沖縄戦を考える」⁽⁶³⁾のなかで、地元紙の取り組み、また東南アジアに対する日本軍の「侵略」を「進出」と書きかえたことに抗議した中国や韓国などとの「あらがいの結びつき」に可能性を見出すと同時に、「検定教科書の絶対化」の危険性を指摘した。

ところで、教科書問題に抗する動きのなかで、「沖繩戦の記憶を語る新たな枠組み」として「命どう宝」が「発見」されたことを屋嘉比収は論じている。⁽⁶⁴⁾ また鹿野政直は、戦争体験に根ざした「命どう宝」という言葉の持つ「普遍性」ゆえに、統治者の側はいち早くその公用に着目し、言葉を掠めとろうとする」動きとして、八三年の献血推進全国大会における皇太子の挨拶や、二〇〇〇年の沖繩サミットでのクリントン大統領の演説で「命どう宝」が用いられたことをとりあげ、「命どう宝」は「定着した瞬間から、こめられていた内実を篡奪され、民心懐柔のための表象となった」と述べていた。⁽⁶⁵⁾ 八三年当時に皇太子来沖に異を唱える論者の多くが過剰な警護を批判するなかで、岡本は皇太子が「ぬちどう宝」を「流用」したことにふれながら、「海洋博」の記憶をたぐりよせるとともに、「復帰」以降の運動の停滞を指摘した。⁽⁶⁶⁾

戦後四十年にあたる一九八五年は、渡嘉敷島の「集団自決」に取材した演劇『海的一座』を見た若い世代が、「集団自決」という悲劇を通して沖繩戦を描くことに拒否反応を示したり、大学のアンケート調査で「沖繩戦についてこれ以上知りたいとは思わない」と答えた学生が三割を越えたように、「若い世代の戦争離れ」や「戦争体験の風化」が指摘されていた。また『沖繩タイムス』では、『鉄の暴風』の執筆者太田良博と『ある神話の背景』の作者曾野綾子による論争が起きた。こうしたなかで、六月に沖繩大学で開かれたシンポジウム「沖繩戦はいかに語り継がるべきか」⁽⁶⁸⁾に参加した岡本は、「今、事実関係をおさえて、その奥にひそむ真実というものを追及していかなければならないという

必要性にかられているが、そのときに力をもってくるのがフィクションである」と発言し、嶋津与志（大城将保）の戯曲「洞窟^{ガマ}」を紹介した。岡本は、作品のなかで、日本兵に身をすりよせて、沖繩の人たちに圧力を加える沖繩の男に注目し、「これは事実であったかもしれないし、なかったかもしれないが、ある種の真実を描いて」おり、「このことを生の証言で聞こうとしても、狭い沖繩の社会では差し障りがあって語れない」けれども、それは「フィクションによってしか語れないという要素でもある」と指摘していた。ここでいう「フィクション」と先の「死者の側にたちうる想像力」は、「沈黙」に言葉を与える作業として重なりあうのではないだろうか。

八〇年代半ばから後半にかけて、岡本は、『南海日日新聞』の「つむぎ随筆」、『毎日新聞』の「視点」⁽⁸⁹⁾、『宮古毎日新聞』の「月曜コラム『無冠』」などのコラム連載を担当した。ここで注目したいのは、「つむぎ随筆 梅雨と紫陽花と」（八五年六月一日）⁽⁹⁰⁾である。岡本は、この文章のなかで「梅雨空には紫陽花がよく似合う」とつぶやく「老人」をとりあげる。その「老人」が、庭の紫陽花を眺めながら、雨脚の強い梅雨の季節になると「あの時はこんなものではなかった」と言い、何かにつけて沖繩戦の頃の記憶にさかのぼることを書き記している。

道は川のように泥水が流れ、畑は水びたしになっていて、砲火をさけて逃げ込んだ洞窟や壕のなかも、池のような泥水で腰をおろすところもなかった。立ったまま壁によりかかっていつの間にかね

こんでしまったこともある、と庭の紫陽花を眺めながら言う。

そして「当時の、眼の底に残っている光景を、そのまま今とひきくらべて、あれこれ言うのも、本当はばちがい話なのかも知れない」が、「老人の胸の奥にやきついた光景は、時を経てもなお鮮やかな」ようであり、「雨にぬれた紫陽花の花をじっとみいつているまなざしの先に何がみえているのか」と問いかけながら、「あじさいの、ひとかたまりになった花びらの一つ一つのなかに、何かがみえているようなそういう眼で、黙って見入っている老人の姿はいちだとさびしげである」と書いていた。それは、「あの時はこんなものではなかった」という「ことば」がかかえる「記憶」に耳をすます試みであったといえるだろう。この「老人」が誰であるのかわからないけれども、梅雨の季節になると、沖縄戦の体験者は戦争の記憶を思い出すことがあるといわれている。⁽¹⁾ そのときによりがえった記憶と現在を比べて、「あの時はこんなものではなかった」と思い、つぶやくことがあるだろう。岡本がエッセイなどでとりあげる人物の多くが、「沖縄」に生きる人たちであるにもかかわらず、ステレオタイプにとどまらずに、その「典型」からこぼれ落ちていくものをすくい取るように描き出している。何かをきっかけにして、日常に不意に訪れる記憶。それを言葉にできないまま「沈黙」に陥ったり、あるいは言葉にしようとしても、ささやかなつぶやきにしかならないかもしれない。そういった「沈黙」と「記憶」と「ことば」が交錯する姿を岡本はとらえていた。

八四年に亡くなった建築家の金城信吉について岡本は、「金城信吉氏のこと」(八四年)のなかで、金城が十歳の頃に長崎で被爆していたことに言及した。⁽⁷²⁾ 後日岡本は、金城の妻から生前の金城信吉が、「被爆の体験について、口に出さないが何かにつけて気にしていた」という話を伝え聞いて、自分が「とりかえしのつかないことをした思い」にとらわれたことを「再び金城信吉氏のことなど」(八五年)で述べていた。⁽⁷³⁾ それと同時に岡本は、被爆した体験の記憶を抱えていた金城信吉の胸中に広がる「深い闇」に対する思慮が足りなかったと書いている。金城が被爆した事実については、金城信吉の「追悼会」のなかで森口豁が「たしかに、現在の医学の水準からすれば、因果関係を立証して、彼の死因を被爆と結びつけることはできないかも知れない、しかし、(中略)金城信吉は、原爆によって殺されたと信じている」という言葉によって知ったのである。ちなみに「(中略)」と記した部分の後には、「…」という表記とともに「空白」を伴った改行があり、そこには金城信吉の抱える「傷」を受けとめた森口の言葉にならない思いが、岡本の文章には流れ込んでいるといえるだろう。つまり岡本は、金城信吉の「深い闇」をくぐり抜けるために逡巡する思考の過程を書くことによって、「沈黙」を語る困難さを表現していたのである。

岡本の「沈黙」へのまなざしは、八六年一月に亡くなった島尾敏雄の追悼文⁽⁷⁴⁾にも見られる。一九七〇年三月に赤松元大尉が沖繩を訪れて騒ぎになっている頃に、岡本は、新川明や川満信一らとともに島尾と那覇で会っていたが、島尾は、赤松のことを気にしているそぶりを一切見せなかったと

いう。その後、島尾は、「那覇に感ず」〔『朝日新聞』一九七〇年五月一四〜一五日〕のなかで、「もし自分が彼とおなじ状況に陥ったときにどんな事態が生まれようかとかんがえたときに、私はあんなたる気持におそれ慄然としたのだった」と書き記していた。その文章に衝撃を受けた岡本は、島尾が亡くなってから、沈黙の奥に潜むものを探るように、島尾やヤポネシア論に関する発言が多くなり、八七年から九〇年にかけて『ヤポネシア論』の輪郭を『新沖縄文学』に連載する。この連載は、島尾の言葉が発せられた文脈を丁寧にとりながら、ヤポネシア論の広がりを検討したものである。

『琉大文学』の頃に小説を書き、梶井基次郎、大城立裕、島尾敏雄といった作家の作品を分析したように、岡本の文学論考の多くは散文を論じたものである。だが、小説を分析する際に、作品の構造や物語の論理を凝視するのは対照的に、詩や短歌などを論じるときには、言葉そのものが抱える「傷」に注目していることがわかる。

おそらく、人はだれでも成長するにつれて、何とは知れないがかけがえのないものを喪い、喪った悲しみや傷みをひそかに抱きかかえて生きているのだらうと思う。（中略）だれにでもある喪われたもののかけがえのなさ、喪った悲しみや傷みの深さを、この詩人ほど知っている人はいないのである。¹⁷⁾と私には思われるのである。

これは、勝連敏男の『勝連敏男詩集』を評した言葉である。ここでは、「喪われたもの、喪ってしまつたもの」の悲しみや傷みを言葉にしたことを評価している。

またこれは韻文ではないが、儀間比呂志の『新版画風土記 沖縄』の書評⁽⁷⁸⁾のなかで、「変容する沖縄」というときに、その変容のありかを見定めることは容易ではなく、「微妙なところにこだわらずと、いきおい奥歯にもののはさまつた歯ぎれの悪い言いまわししかできなくなる」と述べながら、自らの文章の「歯ぎれの悪さ」にくらべて儀間の文章は明快であるが、なかには「歯ぎれの悪さ」があることを指摘した。そういった表現されたものからこぼれおちていく響きに岡本は、耳をすましていた。

さらに岡本は、星雅彦の詩集『マスクのプロムナード』について、「言葉の向こう側にかいまみせる人の顔が浮かんできて、その顔だちが、日常見せている顔と異なっていることに気がついて驚く」ことがあり、「言葉よりも、その言葉を発する顔だちに心が誘われる」ことを次のように述べる。

言葉の中に言葉ではなく、顔だちや吐息のようなものをみてしまうのは、読む者の心の傾きを示しているにちがいないのだが、そればかりではなくて、たとえば整えられた言葉のつながりの中にまぎれこんだ、あるいはつながりの中からふいとこぼれ落ちた言葉が、かえってその存在を示すことがある⁽⁷⁹⁾。

言葉の響きに耳をすまし、言葉の向こう側を見つめる岡本の「ことば」への向き合い方を考えるうえで、『週刊ほーむぷらざ』に連載した「沖縄雑感」(九四年六月)⁽⁸⁰⁾は重要である。連載の初回「この琉球に歌うかなしさ」では、「山といふ山もあらなく川もなき この琉球に歌うかなしさ」という明治四三年一月に『琉球新報』に掲載された長浜芦琴の短歌について論じていた。⁽⁸¹⁾二回目は、新城貞夫の短歌について、三回目は、「ぼちぼちでんな」というたくましさを喚起する言葉について言及した。四回目は、比嘉春潮が米寿の際に詠んだ「義理も踏みたがぬ仕情も尽くち やすやすと登ら米ぬ坂や」にふれながら「琉歌」の類型性の可能性を指摘し、敗戦直後の「屋嘉節」、伊江島の土地闘争のときの陳情口説、CTS闘争で詠まれた琉歌などに言及する。そして、五回目では、木下順二の戯曲『沖縄』の「どうしても取り返しのつかないものを、どうしても取り返すために」という「波平秀」のセリフとヤンバルの自然破壊の問題を結びつけて論じていた。

ここで注目したいのは、新城貞夫の短歌にふれた「なにゆえに……」である。岡本は、新城貞夫の『朱夏』(一九七一年)に収められた、「なにゆえにわが倭歌に依り来しやとおき祖らの声つまづける」と「にっぽんのうたの滅びを念ずれば西の涯よりあかねさしきぬ」を引用しながら、歌集が発刊された七一年という沖縄が急激に変わりゆくなかで紡ぎ出されたことばに耳をすます。

新城は、おそらく倭歌Ⅱ和歌を唯一の自己表現の方法として、それを支えに生きていたにちがいな

いのだが、これらの歌で、彼はついに吃音に近づいている。自分自身を支える「倭歌」と、内なる「とおき親の声」にひき裂かれて絶句する。抛り所であるはずの「にっぽんの歌（短歌）の滅び」を「倭歌」で「念ずる」「念じ」「ざるをえない矛盾。回避しようと思えば回避できたかもしれぬそれらと、それこそ「愚直」にむきあったのが、彼であり、彼らの世代だった⁽⁸²⁾。

これは後に『ことば』から見える沖繩（二〇〇三年）において岡本自身が、「歌の意味からすれば、親の言葉の方に躓いており、言い換えれば、方言が自分の中に存在しないというか、甦らないということだ」と先の解釈を改めたうえで岡本は、次のように述べる。

新城貞夫は短歌の中で「つまずき」と言っているが、まさにそれは「吃音」のことではないか。気持ちが溢れてきてそれこそいろんなことが言いたいけれど、それが言葉にならず歌の中に盛り込めない躓きを感じる。それが吃音として出ているように思う。⁽⁸³⁾

ここで、岡本が「吃音」として言葉が抱える「傷」に目を向けていたことに注目したい。岡本は、「沖繩になぜ詩人が多い―『寡黙』と『吃音』と」（二〇〇三年）のなかで、「沖繩の人達の多くが、語るべきたくさんさんの思いを抱き、にもかかわらずそれを「ことば」になし得ないままに有る」という

印象から「切実な思い」と「抽象的なことば」が相俟って「寡黙」と「詩人が多い」という印象を作ったのではないかと指摘した。そして、新城貞夫の短歌に見られるような「吃音」は、「溢れ出る『思い』が『ことば』に転じようとして思い余って転じきれず、『ことば』に躓いて挙げる『軋み』にちがいない」と述べていた。また「『ことば』と『思い』の乖離は、『思い』の切なさが募ったとき、人をして『吃音』に近づけるに違いない」と述べていたが、それは、戦争体験を語る困難さにもつながっている。「吃音」という言葉にこめられたものを考えるためにも、九五年以降に岡本が対峙した「戦争の記憶」をめぐる思考を見ていきたい。

六 仲宗根政善と沖縄戦の記憶

白い濁りを帯びた半透明の水の中を、小ささまざまな魚がひしめいて泳いでいる。厚い油膜に覆われた水の中は、新鮮な酸素が届かぬらしく、皆苦しげだ。そのうち、力ついて小さな魚が一尾二尾とやがて底の方に姿をかくしていく。それよりやや大きめの何尾かは、水面にたどりつき、口をあけて呼吸をするのだが、それがさらに厚での油膜を招き寄せて、傷つき、力を失って沈み始める⁽⁸⁴⁾。

「戦後五十年」にあたる一九九五年は、「阪神大震災」「地下鉄サリン事件」などがあり、また沖縄では三人の米兵による「少女暴行事件」が起きるなど、「戦後」の分岐点となった年といえる。先に

引用したのは、岡本が、一九九五年の「日本のイメージ」を表現した文章である。その文体は、描いたものの息苦しさが転移したような切迫感に満ちている。またそれは、九五年一月に起きた阪神大震災の映像に触発されて、「瓦礫が崩れて散乱した光景」と「鼻をつく焼き焦がれたものの臭い」とともによみがえった空襲の記憶を描いた文体にも通底する。

その後、岡本は、『沖繩タイムス』の連載企画「検証 戦争の記憶」に書いた「悲劇と論理の区別」⁽⁸⁵⁾のなかで、母親とのいさかいについてふれている。あるとき、ビルマで戦死した兄や開南中学校卒業と同時に戦闘に参加してかえらなかつた兄のことが話題になり、岡本は、無意味な死であったと口にして、母親の激しい怒りをかう。そこから岡本は、肉親の死に対する遺族の思いに考えを向け、戦後五十年の国会決議において、「反省」や「謝罪」の言葉をいれることに遺族会が反発したのは、「それを認めることはとりもなおさず自分たちのアイデンティティが脅かされると受けとめられたからではないか」ととらえる。またそうした遺族の危機意識につけこんでくるようなアジア太平洋戦争を肯定する言説に対して、芥川龍之介の小説「羅生門」を例に、死体の髪をとる老婆が生活のためには仕方がないと言うような、「行為を行為そのものとして、問うのではなく、動機や理由によって行為を正当化する」論理に言及する。さらに「こういう戦争は許されるが、このような戦争は許されない」という区別の論理から、そのような戦争による死のみを殊更に問う根拠などについても問いかけていくのである。

先に述べたように九五年は沖縄にとっても大きな転機となった。⁽⁸⁶⁾ 九月の三人の米兵による「少女暴行事件」、大田昌秀沖縄県知事の米軍用地の強制使用手続きへの代理署名拒否、一〇月二一日に八万五千人を集めた沖縄県民総決起大会。こうした社会動向について、岡本は、「偶感（五）」において、日米安保体制を揺るがすような「反基地闘争」が注目されるなかで、その闘争の出发点となった「反戦地主」の粘り強い原則的な闘争の積み重ねに思いを寄せる。それと同時に、今回の運動の先端に位置する女性たち、「復帰闘争」で未発になったものを取り戻そうとする人たち、若い世代の動きなどに目を向けていた。⁽⁸⁷⁾ こうした運動の新たな動きを取り上げる視点は、岡本が「松永闘争を支援する会」や「琉球弧の住民運動」など運動の現場にかかわり続けてきたことにもよるだろう。

また九五年は、「戦後五十年」ということで、「戦争体験をいかに継承するか」が議論されていたが、「少女暴行事件」以降にはそれ以前のような論議が見られなくなる。こうしたなかで、戦争体験の継承の問題は、くりかえし論議されることが必要だと考える岡本は、座間味島の「集団自決」の実相をとらえようとする宮城晴美の試みに接して、自らの論を省みるようになる。宮城晴美が『沖縄タイムス』に連載した「母の遺言―きり取られた『自決命令』」と「女・子ども・戦争―座間味島『集団自決』の実相」⁽⁸⁸⁾を読んだ岡本は、「水平軸の発想」（一九七〇年）のなかで、「集団自決」の問題を「個」と「共同体」のかかわりの問題として「共生」「共死」の言葉を用いながら、「集団自決」を「共同体生理」として考えていたが、「この問題が戦後長く尾をひき、そのことによって傷つき苦悩をひきずっ

ている人の存在にまで、想像力をのばすことができなかった」と述べた。⁽⁹⁰⁾

また『水平軸の発想』―往事茫茫のなかで岡本は、「復帰」を目前にして、沖縄の「共同体」のありかたを明らかにして、「個」と「共同体」とのかかわりに見通しをつけることを考えていたが、それは「沖縄戦における『集団自決』などの戦争体験」と、「熾烈に燃えている『復帰』への情熱」を貫く性格として「共同体意識」が気になり、それに対する回答をえない限り、『復帰』後の自分自身のスタンスを持ちえないという思い」があったからであり、それが「水平軸の発想」のモチーフになったと述べていた。

この捉え方は、問題を「個」の側にひきつけて考えることで、倫理主義的なものに陥ってしまったようだ。「個」が超越的な価値基準を持ちえないで、「共同体」的な関係性のなかで身を律しているとするならば、何を自立の思想的根拠となしうるか、望ましい、ありうべき「共同体」的な関係性とは何か、という問題の設定の仕方が、思考を倫理主義的な方向に一面化し、結局、手も足も出ないところに追いこんでしまったようだ。⁽⁹¹⁾

岡本が自らの論を見直すなかでうかびあがってくるのは、戦争体験者の存在である。それは先に述べた、宮城晴美の家族であり、あるいは「偶感(九)」で取り上げた、具志八重のような存在であっ

た。平良次子の「ひと『生かされた』生き方―具志八重さん」⁽⁸²⁾を読んだ岡本は、戦時中陸軍病院伝染病棟の看護婦長として伊原の第三外科壕で毒ガスを浴び、九死に一生をえた具志八重に思いをめぐらせる。伊原の第三外科壕は、「ひめゆりの塔」の所在するところであるが、これまでこの壕のなかで生じた悲劇の様相は、学徒隊の「語り」によって伝えられてきた。それは「あくまで個人の視野の届く範囲のものであり、それ以前の壕の模様、学徒隊のその壕への避難の経緯、あるいはそのことの及ぼす影響など、悲劇の背後に広がるさまざまな事柄にまで届くものではない」のだから、異なったりくつもの点と線を重ねることで沖縄戦の体験を立体的に構造化できるのではないかと述べた。⁽⁸³⁾

このように戦争体験の継承が求められるなかで、沖縄の文学においても新たな動きが見られた。一九九七年に目取真俊の「水滴」が、芥川賞を受賞する。この小説について岡本は、「偶感(十二)」(一九九七年九月)のなかで、これまで沖縄戦の体験については数多くの証言が重ねられ、文学作品でも様々に描かれる一方で、「戦争の傷の深さの故に語るのを避け、沈黙をまもってきた人たちが多く存在しているが、「言葉にならない、言葉になしえない記憶が存在し、その記憶がその人の生き方を奥深い部分で規定していること」についてはこれまで光が当たっていなかったことを説明したうえで、『水滴』によって、そういう沈黙する人間の抱える傷の深さを明らかにすることができた」と述べていた。⁽⁸⁴⁾ また「沖縄戦の『語り』と『水滴』と」(一九九七年一〇月)では、「戦争体験の語りは、それが『平和への希求』という願いと結びついて語られるとき、『語り』そのもの、時には『語り手』をも

絶対化、あるいは「聖化」することが少なくない。そしてそのことによって戦争が『語り』の内に封じこめられて、その背後の沈黙の闇にひそむさまざまなものから眼をそむけさせるばかりか、沈黙自体のもつ意味さえ見喪わせることになりかねない」なかで、「水滴」は、膨大に蓄積された沖縄戦の「語り」を批判的にとらえかえしていることを指摘した。⁽⁹⁵⁾

こうした沖縄戦の戦争体験の継承を新たにとらえなおす試みの一方で、一九九九年に、翌年の新平和祈念資料館の開館の準備を進めるなかで、監修委員に無断で、展示内容の変更を行なおうとした、「平和祈念資料館問題」が起きた。この問題では、「見え消し」という文書のなかで「虐殺」を「犠牲」に書きかえ、またアジアでの日本の加害行為や「天皇メッセージ」などが削除され、さらに銃剣を沖縄住民に向ける模型から銃剣が抜きとられたのである。それは、屋嘉比収が指摘するように、沖縄戦の歴史認識が問われた問題であった。⁽⁹⁶⁾

この問題に対して『けーし風』第二五号（一九九九年十二月）では、「検証・平和祈念資料館問題」を特集し、岡本は屋嘉比収と対談した。⁽⁹⁷⁾ 対談のなかで岡本は、加藤典洋が、『敗戦後論』において、三百万人の自国民の犠牲者と二千万人のアジアの人々の死を考えると、日本人の主体を立ちあげるために自国民の死を初めに考えるべきだ、というように提起したことに対して、「三〇〇万人という括り方はその戦争体験の多様性を隠蔽する方向にもなり、事の本質を逆に見失わせる」うえに、「その三〇〇万人に沖縄は入っているのか」と問題提起するとともにその「三〇〇万人」に「括れな

いことを言い続けることが沖縄戦の実相を語ることの意義でもある」と述べていた。また、「多様な個々を三〇〇万人に括るあり方と、沖縄戦をひめゆりだけに象徴するあり方は、イデオロギー的に同じ働きをしている」と指摘していた。

この「平和祈念資料館問題」と翌年の沖縄サミットのあいだに、高良倉吉らによって、日米安保を前提に基地の存在意義を説く『沖縄イニシアティブ』が提言され、激しく議論された。その一方で、戦後五十年を過ぎ、戦争体験者の数が減っていくなかで、「戦争体験の継承」への危機感が高まっていた。

このように「沖縄戦の記憶」が問われることに対して、岡本は応答してきたが、その根底には、一九九五年二月一四日に亡くなった仲宗根政善の存在があったと考えられる。一九六九年六月に岡本は、琉球大学で仲宗根政善のある姿を目にした。

先生は、窓に向けて据えられたテーブルに手について、薄暗くなりかけて人影のない窓の外をのぞきこむように立っておられた。声をかけることもはばかられる一種異様な雰囲気である。それもしばらく。人の気配を感じたのか、ゆっくりとふり返られて、「いま、窓の外をセーラー服の生徒達が通りすぎるのがみえたから」と語って、何とも言えぬかげのような笑みをうかべられた。薄暗くなったキャンパスには人影もなく、二階の窓からは梢近くの葉末が見えるばかりである。⁹⁸

岡本は、沖縄戦で「ひめゆり学徒」を引率した仲宗根が見ていたのは、「沖縄戦の戦火の中を共に通れた生徒たちであったにちがいない」と考え、「そのときの様子から、先生が生徒たちの姿を幻視するのは一度や二度のことではなかったような気がする」と述べていた。ここで注目したいのは、仲宗根が窓の外を見つめる姿に、岡本が「戦争の記憶」と向き合う戦争体験者の姿を重ねて見たことである。岡本は、仲宗根が亡くなって間もなく「仲宗根政善氏を悼む」⁽⁹⁹⁾という追悼文を書いていたが、そこでは、仲宗根が何を見ていたのかについては具体的に書き記していなかった。その後、岡本は仲程昌徳との対談において、「僕はその時、先生に本当に死んだ教え子たちの姿が見えたんだと思った。あの時の様子からは、そうとは思えなかった。今でもそう思っているんです」⁽¹⁰⁰⁾と述べていた。仲宗根が沖縄戦について多くを語らなかったことからすると、岡本は、仲宗根がつぶやいた言葉が抱える「記憶」に言葉を与えようとしていたのではないかと考えられる。あるいは、「戦争の記憶」を語る言葉を模索し続けている、「戦後五十年」の沖縄の「傷」を仲宗根の「沈黙」のなかに、読みとろうとしていたのかもしれない。

その後、岡本は、「仲宗根政善先生と『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』という講演のなかで、仲宗根が執筆した「浄魂を抱いて」の「渡嘉敷良子」の部分が「全体の調子を破ってひどくパセティックになっている」ことを指摘し、そこでは「冷静に客観的に書く文体」ではなく、「渡嘉敷からすれば」というように「渡嘉敷の目」で書かれた「激情的でありながら、たいへん美しい文章が全体の調

子を破って出てくる」ととらえ、「自責の念」が「執筆の最大のモチーフではないか」と述べていた。⁽¹⁰⁾
 二〇〇一年の八月一日から『琉球新報』で「ひめゆりと生きて」というタイトルで仲宗根政善の日記が連載され、ほぼ同時期にひめゆり平和祈念資料館では、『仲宗根政善 情魂を抱いた生涯展』が開催された。岡本は、二〇〇一年八月一二日に放送された「沖縄大好き」(琉球朝日放送)に出演し、ひめゆり平和祈念資料館で展示された、仲宗根の日記を見ながら、次のように発言した。

死者の目で、自分の現在を見る態度を貫かれた。それが戦後を生きる先生の生き方の軸になったと思いますね。日記を書くことで、絶えず、亡くなった学徒たちと戦後向き合っていくわけです。亡くなった人の目で現在の自分を照らし出すことになるわけですね。自己確認……(中略)先生にとって、日記を書くことが生きる証になったのではないでしょう。自分の戦争体験、生き残ったという自責の念を貫いていった。⁽¹¹⁾

この「死者の目で、自分の現在を見る態度」は、「自己確認」を通じて戦争体験と向き合うことであり、それはまた体験した出来事をどのように語るのかという問いにもつながっていくのである。

二〇〇二年の夏に前年『琉球新報』に連載された「ひめゆりと生きて」が、琉球新報社から『ひめゆりと生きて 仲宗根政善日記』として発刊された。この本の書評のなかで岡本は、他者の容易に踏

み込めない、戦時中に「指導者」の立場にあった人の内面が描かれていると述べた。また「偶感(三三)」でもこの本を取り上げ、戦争体験者が戦後自らの戦争体験とどのように向き合ってきたのかについて思考をめぐらせる。岡本は、『日記』の次の言葉を引用する。

戦争体験を語ったあとのむなしさ。同じく体験をした者にはつたわる。しかし、戦争を体験しないものには心の底に沈んだ真実の多くはつたわらず、その表面の泡をふいたものばかりが飛んで行く。表現もしようもないあの胸底にどろどろと沈んだもの、実はそれを伝えたいのだが、やはり伝えようとするとなってしまう。^(四)

そこから、岡本は「戦争体験を語る」ことの困難さを見据える仲宗根の姿を思い浮かべながら、その姿に「〃にもかかわらず語らねばならない」という強い決意」や「語りつづける行為」を見出す。

言葉を尽くしても語り得ないもどかしさをひきずりながらそれでもなお語ろうという矛盾が、語り手をして「ことば」をより「真実」に近づけようとする試みをとらせるのだろうし、語り部のそういう意識的・無意識的な努力が「語り」のリアリティーを支えているに違いない。^(四)

同じ年に岡本は、屋嘉比収との「往復書簡」のなかで屋嘉比が重視する「私的記憶」を語る際に、「記憶」の「何を」語るかも問われてくるだろうと述べ、「私的記憶」は「そのみで完結するのではなく、その後の生きる過程で様々な意味を担うようになるのではないか」と指摘し、「私的記憶」を語ることは、絶えずその「記憶」が「何であるかを自分に問い掛ける行為をとまなうことかもしれない」と述べていた。また「語り部」たちの「痛切な」記憶こそが「戦争の記憶」のリアリティを支えているように、「個」の抱く、身を切るような「記憶」を、その「切実さ」において止揚するところに「集合的記憶」もそれとして生きてくることを説き、「私的記憶」を絶えず「集合的記憶」と関連させながら問い直していく試みが必要であると述べた。⁽¹⁶⁾

このような「戦争」や「復帰」の記憶にまつわる議論を経て、先述した「沖縄になぜ詩人が多い―『寡黙』と『吃音』と」が書かれたのである。この論考のなかで岡本は、「仲宗根政善日記」の言葉を引用しながら、「ここには意識する主体として明晰であり、そのことによって却って主体の『内面』と『言語』の乖離を否応なしに意識せざるを得ない」ことがあり、「その乖離が強く意識されるのは、語るべき内容と、それを語ろうとする思いの痛切さが伴う場合であり、思いの言葉に届かぬことを実感されたときであろう」というように、仲宗根が「戦争体験を語ったあとのむなしさ」と記述するにいたる背景を描いていた。こうした一連の論考を通じて岡本は、痛切さを伴う記憶を語る際に、ある「型」のようなものが必要とされることを示唆していたのではないだろうか。

七 洋平物語

岡本は、『駱駝』四三号（二〇〇三年七月）に小説「洋平物語」を発表する。この作品を考える前に、岡本と同人雑誌『駱駝』との関わりについて述べたい。

一九六五年に岡本は、東京教育大学で知り合った木村幸雄を通じて、大井郁夫が編集を務める『クロノス』同人となり、梶井基次郎に関する論考を次々と発表していった。⁽¹⁸⁾その一方で、「後記」によると、当時岡本は小説の構想を立てていたようである。七一年に『クロノス』は、二〇号で休刊となったが、八〇年に大井を編集に『駱駝』が創刊され、木村と岡本も同人として参加した。⁽¹⁹⁾岡本は、『駱駝』には、沖縄文学に限らず、芥川龍之介や黄春明に関する論考なども書いていたが、小説は「洋平物語」のみである。

この小説は、主人公の「洋平」が、「悔い多き生涯を送って来ました」という言葉をつぶやいたあとに「何だかしっくりこない」感じがしたので、「恥多き生涯を送って来ました」と言い直してみても、「どこか違うなあ」と思いながら庭の剪定に向かうところから始まり、しだいに「洋平」の少年時代の「恥」の「記憶」につながっていく物語である。「洋平」は、少年たちが「高飛び」する足にあわせて、無意識に足が動いていることに少年たちの視線が向けられているのに気づいて、もっと注目をされようと「高飛びのバー」を踏み切る足に合わせて足を動かすが、意識的に動かしていることに勘づいたのか、しだいに少年たちの気を引かなくなり、ひとり取り残された「洋平」は、暗がり迫

るなかを家路につく。こうしたうずくまってしまいたくなるような「記憶」が「洋平物語」では、描き出されている。

ところでなぜ岡本は小説を書いたのだろうか。そのことを考えるうえで、岡本が「思潮」と『駱駝』に書いた、日野啓三を追悼する文章に注目したい。

『沖繩タイムス』の「思潮」に書いた「日野啓三氏を偲ぶ」（○二年十二月一日）では、日野が入退院をくりかえしながらまとめた最後の短編集『落葉 神の小さな庭で』を紹介する。一方、『駱駝』第四二号（○二年十二月）に発表した「日野啓三『落葉 神の小さな庭で』を読む」において前半は「思潮」と同じく本の内容を書き記しているが、後半では二〇〇一年夏の手術後に「目の前を砕けたステンドグラスのたくさんの破片が赤や黄色、緑の輝きを帯びて、渦を巻きながら激しく流れ出す幻視に襲われた」という体験を描いていた。また「どこか病室の近くでママさんコーラスが行なわれている」ような「女声の美しいハーモニー」で、「何時までも同じ曲をエンドレスで流していた」という幻聴を記す。それは、岡本が日野の本を読み返しながら自らの記憶を思い出すままに書き記したもので、「自分の幻想の体験がどんなに貧しく平凡なものであるか」を痛感したという。それとともに、あらためて日野の「表現への意欲と、それを現実のものとする力の大きさを実感する」ことになる。「これを書き終わらなければ死ねないと思いつけてきた」という日野の「あとがき」の言葉に、岡本は『『文学』することの意志』を問われたように思った」と書き記していた。^(略)

また「洋平物語」が掲載された『駱駝』四三号の発行日と同じ七月二三日に、琉球大学にて「座談会『琉大文学』五〇年」が行なわれた。新城郁夫が一九五〇年代の『琉大文学』同人たちが「読者としての何をどう想定したか」と質問したことに對して、岡本は、「自分以外の誰かを読者として想定して書くんじゃないくて、自分に向けて書いているんじゃないか」と答えていた。⁽¹⁰⁾この「自分に向けて書く」というのは、岡本の書く姿勢として一貫したものだだったかもしれないが、創作を再開した時期の発言であることからすると、単に過去を振り返るのとは異なる響きを持っているように考えられる。

「洋平物語」の発表から約一年後に発表された「洋平物語(二)」(『駱駝』第四五号、〇四年八月)は、「あ、それ取ってくださいらない」という言葉から始まる。その言葉は、「洋平」がふと思いついた、亡き「妻」が入院していた頃につぶやいた一言である。「それ」とは何であったのかという問いかけが、この小説全体を流れていて、六〇年安保闘争の時期に友人「M」に受け取りに行くように頼まれた「あれ」をめぐる記憶にも結びついていく。そして「洋平」は、胸に感じる「棘」を見てもらうために訪れた病院で、病室の白い壁に必死に腕を伸ばして何かをつかもうとする「妻」と似た女性のしぐさを見て、「あ、あれ取ってくださいらない」と「妻」が頼んだときの情景を思い出して、「それを握めば今置かれている所から脱け出す事が出来ると信じている者が縋り付こうとする何かであったという気がしてくる」と思うのであった。

過ぎ去った時間、いまはなき存在、うしなわれた言葉。そういった不意に訪れる「記憶」をめぐる

物語は、「どうしても取り返しのつかないことを、どうしても取り返すために」⁽¹¹⁾という岡本が何度か引用していた木下順二の『沖繩』（一九六三年）の「波平秀」の言葉に結びついていく。岡本は、木下の「沖繩」については、くりかえし論じているが、「沖繩雑感」では次のように書き記していた。

「どうしてもとりかえしのつかない」ことを「どうしてもとりかえす」というのは形容矛盾であろう。どうやっても「とりかえす」ことができぬという認識は「断念」に近いからである。しかし、にもかかわらず、というよりそうだからこそ「どうしてもとりかえ」したいと思うのも、これも人間の自然なのだろう。⁽¹²⁾

岡本が「記憶」にこだわ리つづけていたのは、うしなわれたものとの対話を求めているからだろうと考えられる。岡本が「洋平物語」という小説を通じて試みようとしていたのは、「記憶」という、うしなわれた時空間の織りなす世界と向き合うことである。

八 記憶を語る言葉

二〇〇四年の一二月に沖縄大学で開催されたシンポジウム「方法としての沖縄研究」⁽¹³⁾で岡本は報告した。このシンポジウムに寄せられた岡本の文章のなかで、戦時中グラマン機に追われた体験にふれ

ている。ある日岡本は、兄とともに郊外の避難小屋から帰る途中、突然グラマン戦闘機の機銃射撃を受けて這うようにして逃げ帰った。しかし、ずっとあとになって岡本がその日のことを兄と話したところ、兄には銃撃を受けた記憶が全くないことが判明した⁽¹⁵⁾というのである。のちに「記憶すること

記録すること―沖縄戦をめぐる」(〇六年)としてまとめられた論考で岡本は、「記憶」された事実
はそれを体験した過去において完結するのではなく、絶えず「回想する現在」との相互交渉の下に置
かれることを示し、「記憶」を語るとき、「人はニュートラルな状態」ではなく、「どのような契機で
過去を想起するのか、またどのような立場でそれを語るか」という「回想」の契機と「発話」する際
の主体の「現在」が絶えず問われていると述べて、「回想」の重要性を説いていた⁽¹⁶⁾。また、「記憶」と
「記憶」とのかかわりという視点から「沖縄戦の記録」をとらえなおし、「語りえぬ記憶」を語る新た
な試みとして、「島クトゥバ」の証言を映像で記録した「島クトゥバで語る戦世」をとりあげていた。
それは、「記憶の声 未来への目／戦後文学」(〇五年三月)のなかで、「語りえぬ記憶」を抱えて
沈黙し続ける戦争体験者が語り出す状況を作るとともに、「その沈黙の裏に広がる世界を豊かな想像
力で持つて描きあげることにによって戦争の記憶を持たない世代に戦争の持つ意味を明らかに示すこ
も、文学の今後担うべき課題の一つに違いない」と考える問題意識とつながっている⁽¹⁷⁾。

また岡本は、「牧港篤三氏を偲んで」のなかで、『鉄の暴風』の執筆者で詩人の牧港篤三が、一九五〇
年代から六〇年代前半にかけて、詩から遠ざかった「空白」の期間について「この時期の牧港氏は、

自らの戦争についての責任を自らの中で問い直していたために戦争の記憶を作品化する余裕がなかったのではないかととらえ、「この時期に沈黙の中で戦争の体験と向き合ったことが、六〇年代後半からの積極的な発言を支えることになったものと想像される」と述べた。⁽¹⁸⁾

これまで見てきたように岡本は、「沈黙」や「戦争の記憶」と向き合いながら、「沈黙の裏に広がる世界」について思考してきたといえるが、岡本自身もみずからの抱える「沈黙」の「記憶」を言葉にしていくのである。二〇〇五年六月に発表された、「偶感（四二）」では、これまで語られてこなかった、「戦争の記憶」が具体的に描き出されている。

冒頭では、沖縄戦の記憶として何度も言及してきた「空腹」の記憶から「朝鮮人軍夫」の姿が呼び戻されていく。この「朝鮮人軍夫」について岡本は、七二年八月に日弁連と朝鮮総連による「第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行・虐殺真相調査団」が沖縄を訪れた際に、大城立裕や金城正篤とともにコメントを寄せていた。⁽¹⁹⁾しかし、「偶感（四二）」では、岡本の家の近所に陸軍の食料を保管していた「宮古上布の工場」があり、「朝鮮人軍属」の人たちが忍び込んで殴られる様子を見たことや、工場の周辺に、玄米を生のまま口にしたことから消化できなかった排出物があつたことなどが、生々しく思い起こされる。

また岡本が何気なく口ずさむ歌が「軍歌」であるというエピソードから、無意識に「肉体化」された記憶に話が及んだあと、「戦争の記憶よりも身に沁みる痛みを伴って記憶するもの」として、戦後

復員したにもかかわらず、「戦争中に罹患した結核で半年も経たずに死亡した」兄の姿が想起され、「今でもやせ衰えた身を横たえて、大きな眼でじっと表を見つめていた兄の様子を思い起こすことがある」と述べていた。

このように「偶感（四二）」は、エッセイという方法で私的な記憶がかかえる「傷」を表現していたといえる。岡本が回想という形式で私的な記憶を語るのは、『わからないこと』からの出発（六九年）や「水平軸の発想」（七〇年）にも見られた。それらの論考が自覚的に「傷」を語るのに対して、「偶感（四二）」では、不意に思い起こされた「傷」によって書かされているようにみえる。つまり「記憶」と向き合うことは、自らの「傷」と向き合うことでもあり、具体的に語られる記憶は、「身に沁みる痛みを伴って記憶するもの」も含まれるに違いないが、言葉にすることで、記憶と結びつく出来事とのかかわりを持ち続けようとしていたのではないだろうか。岡本は、うしなわれたものとの対話を絶えず試みていたからこそ、「沈黙」の暗がりからよみがえった記憶をつなぎとめるために言葉を紡ぎ出していたのだろう。「記憶」について語る岡本の言葉が切迫感を持っていたのは、そのあたりに理由があったからだと考えられる。

「偶感（四三）」（〇五年九月）では、青山学院高等部の英語の入試問題で「ひめゆり学徒」の体験談を「退屈だ」と記述する記述者の自己の感性のあり方に対する「自己批評」が欠落していることを指摘するとともに、「戦争体験の継承」において「語り手」と「聞き手」の関係性の重要さが説かれ

た。岡本は、『語り手』の伝えようとする意思や情熱と、『聞き手』のそれを受け止める積極的な姿勢という相互の緊張関係が継承を正しく可能にするだろう」と述べていた。それは、体験者が紡ぎ出した言葉と同じくらいの切実さで想像力を紡ぎなおす試みだといえるだろう。

おわりに

二〇〇四年八月一三日、沖縄国際大学構内に米軍ヘリが墜落する事件が起きた⁽¹⁸⁾。その後、辺野古沖への新基地建設に向けたボーリング調査の強行に対して、海上・陸上での抵抗によって阻止したものの、「在日米軍再編」による新基地建設が強行されている。こうした状況のなかで、手ざわりをもった運動を行なう人たちの結びつきを指摘してきた岡本は、「偶感（四四）」（〇五年一二月）で「今後の基地建設問題がどのような結果になろうと、人々をこれまでとは異なる新たな思想的な地平に導くことが期待される」と述べたように、困難さのなかで「希望」を書き込んでいた⁽¹⁹⁾。

これまで見てきたように戦争・記憶・沈黙について書き続けてきた岡本恵徳だが、二〇〇六年八月五日に肺癌のため七二歳で亡くなった。その一週間後の『沖縄タイムス』に「本稿は生前に入稿・校正を終えていました」という注意書きのついた太田良博の『黒ダイヤ』の書評が掲載された。一九四九年に『月刊タイムス』に発表された「黒ダイヤ」は、沖縄の戦後小説の嚆矢となった作品であるが、

インドネシア独立戦争が主題となっている。しかし、岡本は、「ムルデカ（独立）の熱気にわきたつインドネシアへの憧憬が、執筆当時の私の心のなかにあったことだけはいなめない」という太田良博の発言を引用しながら、「題材として沖繩にふれていないにせよ、沖繩の敗戦直後の精神的氣運をまぎれもなく反映するものだったといえる」と述べ、続けて「その意味では、本作品は改めて検証すべき余地がありそうだ」と書き残していた^(註)。

これまで何度も論じてきた「黒ダイヤ」について「改めて検証すべき余地がありそうだ」と述べているが、具体的に新たな読みが示されたわけではない。しかし、その言葉から、作者の意図を超えるものをすくいあげていく読みの試みが実践されているというふうにとらえることができる。それは、「戦争」を体験した人にも制御できないような「記憶」の深みや、「沈黙の裏に広がる世界」を見つめることを通じて、「沖繩」を読みかえていく方法である。

文学・思想・運動といったそれぞれの現場から発せられた「声」を迎え入れながら、手ざわりを持った言葉で応えていく岡本の思考は、権力によって強制的に「物語」化され、回収される「沖繩戦の記憶」をとりかえすうえで示唆を与えてくれる。沖繩が歴史的に被った「傷」から目をそらさずに、言葉にならない思いに耳をすますることが、いま求められている。

注解

(1) 本稿は、拙稿「沖縄を読みかえるまなざしー岡本恵徳著作目録解説I」(『琉球アジア社会文化研究』第六号、琉球アジア社会文化研究会、二〇〇三年)、同「継続する志ー岡本恵徳氏の言葉と思想」(『琉球新報』二〇〇六年九月一九(二二日)、同「沈黙と記憶ー岡本恵徳の言葉をめぐって」(『うらそえ文藝』第二二号、浦添市文化協会、二〇〇七年)、同「解説」(『岡本恵徳著作目録』「岡本恵徳年譜」(岡本恵徳『沖縄』に生きる思想 岡本恵徳批評集』未来社、二〇〇七年)をもとに執筆した。

(2) エドワード・サイード(大橋洋一訳)「晩年のスタイルに関する考察」(『新潮』二〇〇五年一月号)参照。

(3) 川満信一は「岡本恵徳についての断片的記憶」(『うらそえ文藝』第二二号、浦添市文化協会、二〇〇七年)のなかで、『琉球国由来記』をひきながら、「昔から宮古に一軒しかない」祥雲寺のことを書いている。

(4) 岡本恵徳「ぼくと『ぼくへたち』とぼくたち」(『沖縄関係学研究会論集』第五号、沖縄関係学研究会、一九九九年十二月)。

(5) 岡本恵徳・儀間進・幸喜良秀・高良勉「座談会 うちなーぐちから豊かな言語生活を」(『国語通信』二七七号、筑摩書房、一九八五年八月、高良勉「発言・沖縄の戦後五〇年」ひるぎ社、一九九五年所収)。

(6) 岡本恵徳「偶感(二五)」(『けーし風』第二九号、新沖縄フォーラム刊行会議、二〇〇〇年十二月、岡本恵徳・川満信一「対談 文学と思想としての戦後」(『沖縄読書新聞』創刊号、一九七五年四月一日)。

(7) この体験は、後年「記憶」について考えるきっかけとなる。岡本は以下で、この記憶について言及してい

る。新川明・岡本恵徳・新城郁夫・若林千代・屋嘉比収『琉球電影烈伝』の波動 映像とコトバのリバウンド力(『EDGE』一三号、A P O、二〇〇四年七月)、岡本恵徳「方法としての沖縄研究 記憶することと記録すること(上)」(『沖縄タイムス』二〇〇四年六月一七日)、同「記録すること 記憶すること 沖縄戦の記憶をめぐる」(新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立 シマの力(下) 沖縄から何を見るか 沖縄に何を見るか』コモンズ、二〇〇六年)。

- (8) 岡本恵徳「偶感(二)」(『けし風』第六号、新沖縄フォーラム刊行会議、一九九五年三月、『沖縄』に生きたる思想』所収)。

- (9) 岡本注(7) 前掲「記録すること 記憶すること 沖縄戦の記憶をめぐる」。

- (10) 岡本恵徳『琉大文学』のころ(『青い海』第一〇巻第三号(通巻九一号)、青い海出版社、一九八〇年、『沖縄』に生きたる思想』所収)

- (11) 『琉大文学』に関する研究としては、鹿野政直「『否』の文学―『琉大文学』の航跡」(『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社、一九八七年)、仲程昌徳「沖縄現代小説史」(『沖縄文学全集 第七巻 小説Ⅱ』国書刊行会、一九九〇年)、新城郁夫「戦後沖縄文学覚え書き―『琉大文学』という試み」(『沖縄文学という企て』インパクト出版会、二〇〇三年)がある。また、拙稿「他者とのつながりを紡ぎなおす言葉―新川明と金時鐘をめぐる」(『音の力 沖縄アジア臨界編』インパクト出版会、二〇〇六年)を参照されたい。

- (12) 岡本恵徳の『琉大文学』に関する記述は、注(1) 前掲「沖縄を読みかえるまなざし」を参照。

- (13) 岡本注(10) 前掲『琉大文学』のころ、川満信一「沖縄・自立と共生の思想」(『沖縄・自立と共生の思想』海風社、一九八七年)、新川明・小熊英二「沖縄現代史と〈反復帰論〉」(『Inter communication』四七号、NTT出版、二〇〇四年一月) 参照。
- (14) 「空疎な回想」は、後に「ガード」と改題され、『新日本文学』一九五五年九月号に転載された。「ガード」は、『沖縄文学全集第七巻 小説Ⅱ』(国書刊行会、一九九〇年)で読むことができる。
- (15) 栄野川泰「七号の詩と小説をめぐる」・北谷太郎(新川明)「われわれの内部の問題」(『琉大文学』第八号、一九五五年二月)、大城立裕「作品と批評と」・栄野川泰「再び七号の小説について」・北谷太郎「われわれの内部の問題」(『琉大文学』第九号、一九五五年七月)。この作品に関しては、鹿野や新城の注(11) 前掲論文以外に、宮城公子「暴力の表象と沖縄文学の『戦後』一九五〇年代をめぐる」(岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義 ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社、二〇〇五年)や丸川哲史「燃える沖縄(琉球弧)」(『冷戦文化論』双風舎、二〇〇五年)で論じられている。二〇〇七年九月一日、沖縄大学で開催された「岡本恵徳連続シンポジウム 岡本恵徳と沖縄・文学」において、目取真俊が「ガード」について報告した。
- (16) 池澤聡「空疎な回想」(『琉大文学』第七号、一九五四年十一月)、六七頁。
- (17) 新井昶「船越義彰試論―その私小説的態度と性格について」、川瀬信「『塵境』論」(『琉大文学』第六号、五四年七月)、新川明「戦後沖縄文学批判ノート―新世代の希むもの」(『琉大文学』第七号、五四年十一月)。

- これらの論考は、『沖縄文学全集 第一七巻 評論Ⅰ』（国書刊行会、一九九二年）で読むことができる。
- (18) この作品に関する記述は、拙稿「継続する志―岡本恵徳氏の言葉と思想 一『琉大文学』と池澤聡」(『琉球新報』二〇〇六年九月一九日)を参照。また「ガード」に関しては作品論として論じる予定である。
- (19) このときのことは『わからないこと』からの出発(『沖縄タイムス』一九六九年八月二八・二九日、「沖縄」に生きる思想)所収)でも言及されている。また川満信一「飢餓の原基―伊佐浜土地闘争と移民」注
- (13) 前掲『沖縄・自立と共生の思想』や喜舎場順「伊佐浜のおばさん」(『青い海』第一〇巻第三号通巻九一号、青い海出版社、一九八〇年)でも土地接収に言及している。
- (20) アメリカ占領下の沖縄における出版状況に関しては、門奈直樹『アメリカ占領時代 沖縄言論統制史』(雄山閣出版、一九九六年)が詳しい。
- (21) 池澤註(16)前掲「空疎な回想」、五六頁。
- (22) 「第二次琉大事件」に関しては、『琉大風土記』(沖縄タイムス社、一九九〇年)、豊川善一「氷焰―仲宗根政善私記」(『追悼・仲宗根政善』沖縄言語研究センター、一九九八年)、嶺井政和「琉大が燃えた日」(二〇〇〇年)がくわしい。またこの学生処分について、ミシガン州立大学から琉球大学に派遣された「ミシガン・ミッション」のチーフであったカール・デイヴィッド・ミードが作成した「第二次琉大事件」の内報報告書が、山里勝己の『ミード報告』を読む 第二次琉大事件から五〇年(『琉球新報』二〇〇六年九月二七日)・十一月八日・五回連載)によって紹介された。この「ミード報告」に関しては、これから詳細

- に検討していきたいが、「占領者」の側にいた人物の記述をどのように読むのか、そして処分された学生についてどのように考えるのかが問われているといえるだろう。なお二〇〇七年八月一七日に、琉球大学は、処分された学生の一部に「卒業証書」をわたした。このことについては、比屋根照夫『琉大事件』が問うもの（『琉球新報』二〇〇七年五月二五日）、新川明『琉大事件』を考える（『沖縄タイムス』二〇〇七年六月四日）、上里賢一『琉大事件』処分取り消しを考える（『琉球新報』二〇〇七年九月四日）、喜舎場順「伝達式不参加の理由『第二次琉大事件』もうひとつの軌跡」（『沖縄タイムス』二〇〇七年九月一日）がある。また一九六〇年までの三つの「琉大事件」については、「境界に抗する言葉と身体―朴達の裁判」と沖縄（『アジア太平洋研究研究』三一号、成蹊大学アジア太平洋研究センター、二〇〇六年）で論じた。
- (23) 木村幸雄「岡本恵徳君を偲ぶ」（『駱駝』第五〇号、駱駝の会、二〇〇七年二月）参照。
- (24) 岡本恵徳「忘れ難いことの二つ、三つ」（『沖縄文化研究』二二二号、法政大学沖縄文化研究所、一九九六年、『沖縄』に生きる思想』所収）。
- (25) 池澤聡『『教養主義』の悲劇―河童忌にちなんでの断想』（『琉球新報』一九六七年八月二二―二三）、同「生と人間性への回帰―漱石忌によせて」（『琉球新報』一九六七年二月一三―一四）。
- (26) 大城立裕「神島」（『新潮』一九六八年五月号）。この作品は、後に戯曲化され、その後、単行本化する際に加筆修正が行なわれた（大城立裕『神島』日本放送出版、一九七四年）。
- (27) 池沢聰「大城立裕『神島』を読んで」（『沖縄タイムス』一九六八年五月一六―一八日、『現代沖縄の文学と

思想』沖縄タイムス社、一九八一年所収)。

- (28) この本は一九五一年に出版された『沖縄の悲劇―姫百合の塔をめぐる人々の手記』(華頂書房)の改版である。なお『沖縄の悲劇』は、四度にわたって改版されている。

- (29) 池沢聰「『ああ、ひめゆりの学徒』を読んで」(『沖縄タイムス』一九六九年二月二七日、『沖縄』に生きる思想)所収)。二〇〇六年十二月九日に開催された「岡本恵徳連続シンポジウム 女たちによる岡本恵徳」において、仲田晃子が発表した「仲宗根政善と岡本恵徳」のなかで、この書評を取り上げていた。

- (30) 樺美智子については、唐獅子の「六月十五日」(『沖縄タイムス』一九七〇年六月一四日)、「終わりの弁」(『沖縄タイムス』一九七〇年六月二八日)でも言及している。

- (31) 注(19)前掲「『わからないこと』からの出発」。

- (32) 岡本恵徳「戦争体験の記録」(『沖縄タイムス』一九六九年七月一日、『沖縄』に生きる思想)所収)。

- (33) 岡本恵徳「戦争責任の追及」ということ」(『沖縄タイムス』一九六九年九月二八日、『沖縄』に生きる思想)所収)。

- (34) 「集団自決命令しなかった」(『琉球新報』一九七〇年三月二七日)。

- (35) 岡本恵徳「責任の追及」ということ」(『沖縄タイムス』一九七〇年四月五日、『沖縄』に生きる思想)所収)。

- (36) 金城重明「渡嘉敷島の集団自決と戦争責任の意味するもの」(『琉球新報』一九七〇年四月一五日)。この文

章の一部は、『集団自決』を心に刻んで』（高文研、一九九五年）に収録されている。

- (37) 岡本恵徳『「沖繩に生きる」思想—『渡嘉敷島集団自決事件』の意味するもの—』（『労働運動研究』第九号、一九七〇年七月、『沖繩』に生きる思想』所収）。

- (38) 新川明『「非国民」の思想と論理 沖繩における思想の自立について』（『反国家の兇区』社会評論社、一九九六年）。新川の「反復帰論」に関しては、新川明『沖繩・統合と反逆』（筑摩書房、二〇〇〇年）と、屋嘉比収「自らの内側を穿つ思想—新川明の『反復帰論』」（『前夜』第Ⅰ期九号、二〇〇六年一〇月）で詳細に論じている。また新川の『反国家の兇区』に関しては、戸邊秀明「新川明『反国家の兇区』」（『戦後思想の名著50』平凡社、二〇〇六年）がある。そして納富香織の「新川明著作目録」及び「新川明氏紹介」（『新川明文庫目録』西原町立図書館、二〇〇六年）によって、新川の全体像を知ることができる。

- (39) 川満信一「沖繩における天皇制思想」（『沖繩・根からの問い—共生への渴望』泰流社、一九七八年）。この論考における「集団自決」と「復帰運動」が「天皇（制）イデオロギーに吸引されたのと同じ心的位相」という川満の読みは、「沖繩の戦後思想のひとつの到達点である」と仲里効は指摘していた（『漂流と迂回あるいは始まりにむかっの旅』『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』未來社、二〇〇七年）。

- (40) いれい・たかし「現代をどう生きるか（三）」（四）／島の戦争体験」（『沖繩タイムス』一九九九年七月一四—一五日）。

- (41) この「わたし自身が起こすかも知れぬ」という視点の重要性については、屋嘉比収『「水平軸の発想」／私

- 的覚書―「集団自決」を考える視点として―」（『琉球アジア社会文化研究』第六号、琉球アジア社会文化研究会、二〇〇三年）、同「追い込まれた命―「集団自決」と「集団死」をめぐって〈五〉」（『琉球新報』二〇〇五年六月二十七日）で言及されている。
- (42) この指摘を引用しながら「復帰運動」の体質を批判した論考に、注（39）前掲仲里効『オキナワ、イメージの縁（エッジ）』がある。
- (43) 岡本恵徳「水平軸の発想―沖縄の『共同体意識』について」（『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社）、二二五頁。
- (44) 岡本恵徳「戦後沖縄の文学」（『中央公論』一九七二年六月号、『沖縄文学の地平』所収）。本稿では、論じられなかった七〇年前後の岡本の試みについては、注（1）前掲「沖縄を読みかえるまなざし」を参照されたい。
- (45) 岡本恵徳『私的記憶』をめぐって―屋嘉比取氏への返書』（『社会文学』第一七号、社会文学会、二〇〇二年八月）。
- (46) 高良倉吉『沖縄イニシアティブ』（ひるぎ社、二〇〇〇年）、仲里効・高良倉吉『対論「沖縄問題」とは何か』（弦書房、二〇〇七年）参照。
- (47) 「松永裁判」に関しては、松永闘争を支援する市民会議編『冬の砦 沖縄・松永裁判闘争』（たいまつ新書、一九七七年三月）が詳しい。また、七七年に「国家賠償」を求める裁判を起こしたが、それは松永国賠を

闘う会編『冤罪と国家賠償』（緑風出版）にまとめられた。またこの「国家賠償」に関して岡本は、「松永裁判のこと」（『琉球弧の住民運動』復刊第七号（通巻三三三号）、一九八九年八月）、「十六年目の節目」（『琉球弧の住民運動』復刊第九号（通巻三四四号）、一九九〇年十二月、『沖繩』に生きる思想』所収）で言及している。

(48) 岡本恵徳「一一・一〇ゼネストへの軌跡」（注（47）前掲『冬の砦』、『沖繩』に生きる思想』所収）。機関誌『沖繩・冬の砦』は、〇号（一九七二年二月一日）から三六号（一九七六年七月二〇日）まで発行されたが、現在公的機関では所蔵していない。『岡本恵徳批評集』編集の過程で松永優氏よりお借りした。心より感謝申し上げたい。「松永裁判」に関しては、本稿では十分に論じることができなかったが、稿を改めて論じたいと考えている。

(49) 呼びかけ人は、新川明、新崎盛暉、岡本恵徳、狩俣真彦、新屋敷幸繁、玉栄清良、比屋根照夫、星雅彦、松田賀孝の九人であった。「CTS訴訟を支援／若手学者文化人「闘争広げる会」結成へ」（『沖繩タイムス』一九七四年九月八日）参照。

(50) 創刊号の編集者は、新崎盛暉、新川明、岡本恵徳、いれいたかし、山門健一、阿部亮一、森井芳勝であった。『琉球弧の住民運動』は、二五号（八四年）まで刊行された後、八六年に復刊し、通巻二六号から三四号（一九九〇年）まで刊行され、岡本は発行責任者をつとめた。CTS阻止闘争を拡げる会編『琉球弧の住民運動』（三一書房、一九八一年）、「琉球弧の住民運動を拡げる会年表」『琉球弧の住民運動』第二五号、

琉球弧の住民運動を抬げる会、一九八四年九月）、新崎盛暉「『琉球弧の住民運動』から『けーし風』へ」
『沖繩同時代史 第一〇巻 新たな思想は創れるか』凱風社、二〇〇四年）参照。

- (51) 岡本恵徳「曾野綾子『ある神話の背景』をめぐって」(『沖繩タイムス』一九七三年六月八日～一〇日、『沖繩文学の地平』所収)。

- (52) 岡本注(51) 前掲「曾野綾子『ある神話の背景』をめぐって」。

- (53) 「戦後沖繩文学の諸相」と改題して『沖繩文学の地平』に収録されている。

- (54) 吉村昭「わが沖繩―その原点とプロセス―取材ノートを中心に―/殉国③」(『琉球新報』一九七三年六月二十八日)。

- (55) 岡本注(43) 前掲「水平軸の発想」。

- (56) 岡本恵徳「海洋博を考える―その文化的所見」(『沖繩タイムス』一九七五年七月一八～一九日、『沖繩』に生きる思想』所収)。

- (57) この特集に岡本は、「戦後沖繩の『天皇制』論」を書いている。

- (58) 岡本恵徳「私にとっての天皇制」(『琉球大学学生新聞』第一三六号、一九七五年二月一日)。同じ号に、
新川明「『天皇論』ブームへの視角 ジャーナリズムの動向と状況」、川満信一「天皇制思想の死角」、喜友名嗣正「『紫微論争』の死結を越えうるか」が掲載されている。

- (59) 岡本恵徳「解説 沖繩における天皇制論」(『沖繩にとって天皇制とは何か』沖繩タイムス社、一九七六年)。

(60) 大城立裕「沖縄文化の位相」(『国語科通信』三六号、角川書店、一九七七年)。

(61) 岡本恵徳「私にとっての琉球処分 『同化』と『異化』をめぐって」(『沖縄タイムス』一九七八年三月一四、一五日、『沖縄』に生きる思想)所収)。

(62) 岡本恵徳「十五年戦争を読む(一八)」(『沖縄タイムス』一九八一年二月八日)。

(63) 岡本恵徳「教科書問題と沖縄戦を考える」(『琉球弧の住民運動』第二号、琉球弧の住民運動を拓げる会、一九八二年一月、『沖縄』に生きる思想)所収)。

(64) 屋嘉比収「歴史を眼差す位置—『命どう宝』という発見」(上村忠男編『沖縄の記憶／日本の歴史』未來社、二〇〇二年)。

(65) 鹿野政直「沖縄をめぐる／に発する『文化』の状況」(新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立 シマの力(下) 沖縄から何を見るか 沖縄に何を見るか』コモンズ、二〇〇六年)。

(66) 岡本恵徳「警護の中の皇太子来沖」(『沖縄タイムス』一九八三年七月一八、一九日、『沖縄』に生きる思想)所収)。

(67) 岡本恵徳「どう語るか『戦争』—『海の一座』をめぐる雑観」(『沖縄タイムス』一九八五年六月一九、二一日)、『つむぎ随筆 八月一日に寄せて』(『南海日日新聞』一九八五年八月一七日)。

(68) 岡本恵徳「沖縄戦はいかに語り継がれるべきか(三)」(『ある神話の背景』にふれながら)、『琉球新報』一九八五年七月二二日)。

- (69) 『毎日新聞』夕刊に連載された「視点」は高良勉氏より教示された。心より感謝申し上げたい。『沖縄』に生きたる思想』収録の「著作目録」には入っていないため、タイトルと日付を以下にあげたい。『琉球弧』から(七月一日)、「人の輪で基地を包む」(七月八日)、「ある映像から」(七月十五日)、『ヤポネシア論』をめぐって(七月二十二日)、「黄春明のこと」(七月二十九日)、「再び黄春明をめぐって」(八月五日)、「御執成書」(八月十二日)、「さりげなく、ほどほどに」(八月十九日)、「花束」(八月二十六日)、「非武装アイヌ自治区構想」(九月二日)、「ある『出版記念会』から」(九月九日)、「壺」(九月十六日)、「南島のざわめき」(九月三十日)。
- (70) 岡本恵徳「梅雨と紫陽花と」(『南海日日新聞』一九八五年六月十五日)。
- (71) 大城将保『沖縄戦を考える』(ひるぎ社、一九八三年)、仲宗根政善『ひめゆりと生きて 仲宗根政善日記』(琉球新報社、二〇〇二年) 参照。
- (72) 岡本恵徳「金城信吉氏のこと」(『沖縄・反核・反戦アンソロジー 島空間から』沖縄・文学を通して反核反戦を考えるつどい、一九八四年)。
- (73) 岡本恵徳「再び金城信吉氏のことなど」(『島空間から、八五』沖縄・文学を通して反核・反戦を考えるつどい、一九八五年)。
- (74) 岡本恵徳「島尾さんの素顔と陰影」(『新沖縄文学』七〇号、沖縄タイムス社、一九八六年十二月)。
- (75) 島尾敏雄「那覇に感ず」(『朝日新聞』一九七〇年五月十五日)。「那覇に感ず」については、『那覇に感ず』

再読」(『沖繩』に生きる思想)所収)でも言及している。

- (76) 島尾が亡くなる前に書かれた岡本の論考として「私にとっての琉球弧」(『カイエ』一九七八年十二月臨時増刊号、『沖繩文学の情景』『ヤポネシア論』の輪郭)所収)がある。

- (77) 岡本恵徳「喪失感の彼方に微光／勝連敏男『勝連敏男詩集』」(『沖繩タイムス』一九七九年十二月十五日)。
また勝連に関しては、『勝連敏男詩集』(脈発行所)の書評(『琉球新報』一九八九年六月二二日)や「勝連敏男のこと」(『脈』第五号、脈発行所一九九四年一〇月)がある。

- (78) 岡本恵徳「故郷に寄せる熱い思い／儀間比呂志『新版画風土記 沖繩』」(『沖繩タイムス』一九八九年三月一四日、夕刊)。

- (79) 岡本恵徳「言葉の向こうに漂う顔／星雅彦『マスクのプロムナード』」(『沖繩タイムス』一九九四年一月一日、夕刊)。

- (80) 一九九四年『週刊ほーむぶらざ』(沖繩タイムス社)の「沖繩雑感」に連載された「この琉球に歌うかなしさ」(六月二日)、「なにゆえに……」(六月九日)、「ぼちぼち……」(六月一六日)、「歌は生きている」(六月二三日)、「どうしても……」(六月三〇日)は、『沖繩』に生きる思想に収録されている。

- (81) 一九七〇年の東京での研修中に見つけたこの短歌については、「近代沖繩文学史論」(一九七五年)をはじめ、エッセイなどでもくりかえし引用している。

- (82) 岡本注(80)前掲「なにゆえに……」。

- (83) 岡本恵徳・新城郁夫・屋嘉比収「『ことば』から見える沖縄」(『沖縄を深く知る事典』日外アソシエーツ、二〇〇三年)。座談会に出席した新城郁夫は「沖縄・歌の反国家―新城貞夫の短歌と反復帰反国家論」(『国語と国文学』第九九九号、二〇〇六年)のなかで、「この歌には、国家・国語・国民の主体化作用を貫く〈依る―依らしむ〉力学をめぐる植民地主義的アポリアが、幾層ものメタレベルにおける『倭歌』への介入となって遂行されていると言える」と述べていた。この論文を含む新城郁夫による新城貞夫論は、新城郁夫『到来する沖縄―沖縄表象批判』(インパクト出版会、二〇〇七年)に収録されている。
- (84) 岡本恵徳「振り返って思うこと」(『沖縄タイムス』一九九五年二月二一日、『沖縄』に生きる思想」所収)。
- (85) 岡本恵徳「〈検証 戦争の記憶〉悲劇と論理の区別」(『沖縄タイムス』一九九五年六月二二日、『沖縄』に生きる思想」所収)。
- (86) 新崎盛暉『沖縄現代史 新版』(岩波新書、二〇〇五年) 参照。
- (87) 岡本恵徳「偶感(五)」(『けーし風』第九号、新沖縄フォーラム刊行会議、一九九五年二月、『沖縄』に生きる思想」所収)。
- (88) 宮城晴美「母の遺言―きり取られた『自決命令』」(『沖縄タイムス』一九九五年六月二二日～二四日)。
- (89) 宮城晴美「女・子ども・戦争―座間味島『集団自決』の実相」(『沖縄タイムス』一九九六年六月二〇日～二五日)。

- (90) 岡本恵徳「偶感(八)」(『けーし風』第二二号、一九九六年九月、『沖繩』に生きる思想』所収)。
- (91) 岡本恵徳「『水平軸の発想』往事茫茫」(『EDGE』第四号、APO、一九九七年六月、『沖繩』に生きる思想』所収)。
- (92) 平良次子「ひと『生かされた』生き方―具志八重さん」(『けーし風』第二二号、新沖繩フォーラム刊行会議、一九九六年九月)。
- (93) 岡本恵徳「偶感(九)」(『けーし風』第三三号、新沖繩フォーラム刊行会議、一九九六年二月、『沖繩』に生きる思想』所収)。
- (94) 岡本恵徳「偶感(十二)」(『けーし風』第一六号、一九九七年九月、『沖繩』に生きる思想』所収)。
- (95) 岡本恵徳「沖繩戦の『語り』と『水滴』と」(『文学時標』第一一六号、文学時標社、一九九七年一〇月)。
- (96) 屋嘉比収「『沖繩』をめぐる論争・論議―平和祈念資料館問題／沖繩イニシアティブ論争／沖繩平和学会での皇族記念講演問題」(高橋哲哉編『歴史認識』論争』作品社、二〇〇二年) 参照。
- (97) 岡本恵徳・屋嘉比収「対談 資料館問題を開く」(『けーし風』第二五号、新沖繩フォーラム刊行会議)。
- (98) 岡本注(24) 前掲「忘れ難いことの二つ三つ」。
- (99) 岡本恵徳「仲宗根政善氏を悼む」(『朝日新聞』一九九五年二月一七日、夕刊)。
- (100) 岡本恵徳・仲程昌徳「仲宗根政善追悼対談」(『沖繩タイムス』一九九五年二月三日)、のちに「仲宗根政善の戦争・戦後体験と倫理」として『追悼 仲宗根政善』(沖繩言語研究センター、一九九八年)に収録さ

れた。

- (101) 岡本恵徳「仲宗根政善先生と『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』」『沖縄文学の情景』ニライ社、二〇〇〇年、二三二～二三三頁。また屋嘉比収は「岡本恵徳の作法」『すばる』二〇〇七年二月号で、岡本と仲宗根との関係性について論じている。

- (102) 『沖縄大好き／仲宗根政善 情魂を抱いた生涯展』（二〇〇一年八月一二日放送）。仲程昌徳研究室所蔵の映像を見せていただいた。心より感謝申し上げたい。

- (103) 仲宗根政善『ひめゆりと生きて 仲宗根政善日記』（琉球新報社、二〇〇二年）、三三六頁。この日記の記述は、仲程昌徳が「解説『ひめゆりの塔の記』を読む」のなかで引用したもので、本文には収録されていない。岡本は、『ひめゆりと生きて』の書評（『琉球新報』二〇〇二年八月二五日）を経て書かれた「偶感（三二）」（『けーし風』第三六号、新沖縄フォーラム刊行会議、二〇〇二年九月）のなかで、「実はこういう記述こそ本書に取り入れて欲しかった部分なのだが…」と括弧付きでつぶやいていた。しかし、見方をかえると、本文にはおさめきれなかった仲宗根の「ことば」を仲程が「引用」という方法で伝えようとした意義を岡本は評価しているようにみえる。

- (104) 岡本注（103）前掲「偶感（三二）」、七三頁。また岡本は、文末において「もっと別の『肉声』のようなものが存在しなかっただろうか」と述べていた。

- (105) 岡本注（45）前掲『私的記憶』をめぐって。

(106) 本稿では、岡本の梶井基次郎論について論じることができなかった。『クロノス』に発表された一連の梶井論に関しては、註(1)前掲「沖繩を読みかえるまなざし」で整理した。

(107) (大井)「後記」『クロノス』一二、クロノス社、一九六六年五月)には、「岡本恵徳は、一連の梶井基次郎論を残して、故郷沖繩へ帰った。この三月のことである。目下、かの地にいかに定着すべきか、探索中である。また、徐々に小説を構想しつつあるという。期して待ちたい」と記されていた。

(108) 創刊号時の同人は、大井郁夫、木村幸雄、内山幸夫、岡本恵徳、多岐祐介の五人。創刊号に岡本は執筆していないが、大井が「〈人〉岡本恵徳君」『駱駝』創刊号、一九八〇年五月)を書いている。なお二〇〇七年二月発行の『駱駝』第五〇号は、「追悼岡本恵徳」となっている。

(109) 岡本恵徳「日野啓三『落葉 神の小さな庭』を読む」『駱駝』四一号、二〇〇二年二月)。

(110) 新川明・豊川善一・中里友豪・岡本恵徳・屋嘉比収・新城郁夫「座談会『琉大文学』五〇年」『けーし風』第四〇号、新沖繩フォーラム刊行会議、二〇〇三年九月)。

(111) 木下順二『子午線の祀り・沖繩』岩波文庫、一九九九年。

(112) 「わが沖繩―その原点とプロセス」『琉球新報』一九七四年一月八(一〇日)、注(76)前掲「私にとっての琉球弧」(一九七八年)、「木下順二戯曲『沖繩』」『新沖繩文学』九一号、一九九二年)、『現代文学にみる沖繩の自画像』(高文研、一九九六年)などで木下の「沖繩」に言及していた。

(113) 岡本注(80)前掲「どうしても……」(『沖繩』に生きる思想)、一七八頁。

(114) 当初、二〇〇四年六月一七日にシンポジウムは予定されていたが、台風のため、二月一九日に延期となった。

(115) 岡本注(7) 前掲「記憶すること 記憶すること」。

(116) 岡本注(7) 前掲「記録すること 記憶すること 沖縄戦の記憶をめぐって」。

(117) 岡本恵徳「記憶の声 未来への目／戦後文学(下)」(『沖縄タイムス』二〇〇五年三月一六日、『沖縄』に生きた思想』所収)。

(118) 岡本恵徳「牧港篤三氏を偲んで」(『うらそえ文芸』第一〇号、浦添文化協会事務局、二〇〇五年五月、『沖縄』に生きた思想』)。

(119) 岡本は、「少年のとき見た朝鮮人軍夫の記憶はあるが、十分彼らの問題を考えたことはなかった」と述べるとともに、「復帰」をめぐる議論のなかで、「朝鮮」の問題が見落とされていたことや「内なる差別の問題」とつきつめていけば結びつくことを指摘していた(「もう一つの沖縄戦の実態／或る在沖朝鮮人の証言」『沖縄タイムス』一九七二年八月二六日)。この時期に動きについては、新城郁夫が「奪われた声の行方―七〇年代沖縄文学を「従軍慰安婦」から読みかえす」(『文学史を読みかえる七(ヘリブ)という革命』インパクト出版会、二〇〇三年、新城注(83) 前掲『到来する沖縄』所収)で論じている。

(120) 黒澤亜里子編『沖国大がアメリカに占領された日』青土社、二〇〇五年。

(121) 岡本恵徳「偶感(四四)」(『けーし風』第四九号、二〇〇五年二月、『沖縄』に生きた思想』所収)、『沖

縄は基地を拒絶する』(高文研、二〇〇五年) 参照。

(122) 岡本恵徳「太田良博『黒ダイヤ』」『沖縄タイムス』二〇〇六年八月二日、『沖縄』に生きる思想』所収)。

(付記) 本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。